Olympic

オリンピック教育

Vol.3 2014/04-2015/03

Education

筑波大学オリンピック教育プラットフォーム
筑波大学附属学校オリンピック教育推進専門委員会

目次

はじめに

オリンピック・パラリンピック教育の推進に向けて ..... 石隈 利紀 ... 1

創立 5 周年を迎えて ..... 真田 久 ... 1

活動報告

第 5 回オリンピック教育フォーラム ..... 杉並 伸勉 ... 2

第 6 回オリンピック教育フォーラム ..... 村上 祐介 ... 3

オリパラフォーラム 2014 ..... 大林 太朗 ... 4

オリンピック・パラリンピック教育授業づくりワークショップ ..... 宮崎 明世 ... 5

クーベルタン－嘉納ユースフォーラム 2015 ..... 中塚 義実 ... 6

日本スポーツ教育学会第 34 回大会参加報告（シンポジウム） ..... 真田 久 ... 7

日本スポーツ教育学会第 34 回大会参加報告（口頭発表） ..... 宮崎 明世 ... 8

国際学会参加報告 ..... 荒牧 亜衣 ... 9

実践報告

競い合いながらフェアプレーを学ぶ ..... 眞榮里耕太 ... 10

附属中学校の取り組み ..... 國川 聖子 ... 11

附属高等学校におけるオリンピック教育の実践 ..... 浅見 道明 ... 13

ハイジャンプ世界記録の展示 ..... 横尾 智治 ... 15

附属坂戸高等学校のオリンピック教育の取り組み ..... 渡會 愛梨 ... 16

リオデジャネイロパラリンピック・東京パラリンピックを目指して ..... 寺西 真人 ... 17

附属聴覚特別支援学校の取り組み ..... 苦瓜 道代 ... 19

附属大塚特別支援学校におけるオリンピック・パラリンピック教育の実践報告 ..... 根本 文雄 ... 20

附属桐が丘特別支援学校のオリンピック教育の取り組み ..... 小坂 桂子 ... 22

附属久里浜特別支援学校のオリンピック教育の取り組み ..... 河場 哲史 ... 24

大学におけるオリンピック教育　筑波大学における全学共通の総合科目としての教育実践について ..... 嵯峨 寿 ... 25

特別寄稿

オリンピック・パラリンピック教育の可能性 ..... 荒牧 亜衣 ... 26

TIAS & AISTS 短期プログラム海外研修生との国際交流 ..... 長岡 樹 ... 30

附属視覚特別支援学校生徒と IOC 委員との交流プログラム ..... 星 祐子 ... 35

小学校教育における年間計画に基づいたオリンピック・パラリンピック教育の実践 ..... 上田 隆司 ... 36

筑波大学附属学校オリンピック教育推進専門委員会委員（平成 26 年度） 38

筑波大学オリンピック教育プラットフォーム組織図 38

附属学校におけるオリンピック教育推進専門委員会設置要項 39

はじめに

オリンピック・パラリンピック教育の推進に向けて

筑波大学副学長、附属学校教育局教育長　　石隈利紀

2020 年オリンピック・パラリンピック東京大会に向けて、教育の場においても様々な取組が始まりつつある。筑波大学においても、筑波大学オリンピック教育プラットフォーム（CORE）を中心として、附属学校とともにオリンピック教育を題材にした国際理解や平和への貢献意識を養う教育の推進を目標とした指導研究及び教育活動が展開されている。また附属学校 11 校には特別支援学校 5 校も含まれ、在校生や卒業生によるパラリンピックをはじめそれぞれの障害を対象にした競技大会への参加も盛んである。そこで、附属学校 11 校が取り組む「オリンピック・パラリンピック教育」は、障害のあるなしに拘わらず「スポーツやオリンピック（パラリンピック等を含む）を教材として、国際的な視野に立ち世界平和の構築に貢献する人材を育成する教育的活動」と定義し、より具体的な実践内容として、以下の 3 つをあげている。

1. オリンピック自体とその歴史の学習
2. オリンピックに関連した世界各国・地域の文化や社会問題等に関する学習
3. オリンピックの精神やスポーツの価値についての学習

今年度、本委員会は、附属学校全教員 530 人を対象に授業等における「オリンピック・パラリンピック教育に係る指導事例」の収集を行った。その結果、小学校では社会や国語の授業に、中学校、高等学校では体育理論などの教科学習の他に総合的な学習の時間や学校行事等で、特別支援学校においてはトピックスとして授業に取り入れていることがわかった。来年度は、これらの調査資料をもとに、各附属校において児童生徒の発達状態に応じた教育プログラムやカリキュラム開発を発展させるとともに、全国の学校のオリンピック教育に貢献したいと思っている。

創立 5 周年を迎えて

筑波大学体育系、CORE 事務局長　　真田 久

2020 年の東京オリンピック・パラリンピックに向けて、オリンピック教育への関心が高まっています。東京都が教育推進校 600 校を選定し、文部科学省による全国展開が具体化され、一方では民間企業においても様々な企画が進められています。CORE は、4 年間の実績をもとに各方面への情報提供を行いながら、オリンピック教育に関する国際的研究の推進と実践モデルの考案を行っていきます。

2014 年度は、政府事業「Sport for Tomorrow」の一環で設置された「つくば国際スポーツアカデミー：TIAS」との共催で、オリパラフォーラム 2014 を開催しました。そこでは、1964 年の東京大会時の事例研究の報告から、海外からのゲストを交えて 2020 年のオリンピック・パラリンピックに関する教育プログラムを検討しました。また、12 月には教員向けの授業づくりワークショップ、3 月には高校生を対象としたイベント形式のユースフォーラムを開催し、これまでとは異なる多様な実践的事業を推進しました。来年度も、日本では唯一の IOC オリンピック研究センターとして、国内外のオリンピック教育の発展に努めてまいります。今後とも、ご高配のほどよろしくお願いいたします。

活動報告

第５回オリンピック教育フォーラム

CORE 事務局　　杉並伸勉

オリンピック教育フォーラムは、附属学校におけるオリンピック･パラリンピック教育の実践や課題について意見交換を行い、その後の方向性について議論することを目的に 2011 年より定期的に開催している。

5 回目の開催となる本フォーラムは附属学校におけるオリンピック教育の実践に着目した内容となり、2013 年度に実施した附属中学校、附属坂戸高等学校による取り組みが報告された。

大林太朗氏からは、2014 年 3 月に実施したソチオリンピック・パラリンピックにおけるオリンピック教育プログラムに関するする調査報告がされた。調査対象であるロシア国際オリンピック大学（RIOU）での大会以前に大会組織委員会や地域住民を対象に実施された教育プログラムと一校一国運動日本担当校である第 15 番学校での教育プログラムに関する報告がされた。また調査結果に基づき 2020 年東京オリンピック・パラリンピックへ向けた示唆が提示された。渡曾愛梨氏からは、「武道とオリンピックからみる国際理解」をキーワードに附属坂戸高等学校での実践について報告がされた。授業の展開方法や授業終了後に明らかになった課題が紹介され、今後の実践における留意点が示された。今後の取り組みとして、他教科との連携を図るためにオリンピック教育を総合教科に取り入れる方向性が示され、また今後オリンピック教育を体系化した取り組みとして行うことや大学と高校の連携を図ることによる展望が示された。長岡樹氏からは附属中学校において実践しているブラインドサッカーを通じた実践について報告がされた。目的として生徒によるユニバーサルデザインやグローバル社会（普遍的な物事）、他者への理解を挙げている。今後の展望として、見方を変えることにより日常生活もオリンピック教育に発展する可能性があることについて言及した。

またディスカッションは「オリンピック教育の実践をどのように体系化し、発信を行うか」と題し、現在までのオリンピック教育の実践を踏まえ、文部科学省の今後の取り組みや実践のモデル作りなど 2020 年東京オリンピック・パラリンピックに向けたオリンピック・パラリンピック教育の実践方法について多くの発言がされた。

開催概要

1. 日時：2014 年 6 月 24 日（火）17:30 ～ 19:30
2. 場所：筑波大学東京キャンパス文京校舎 1 階 121 講義室
3. プログラム
   (1) 開会挨拶　石隈利紀（筑波大学副学長、附属学校教育局教育長）
   (2) 平成 26 年度 CORE 事業計画について　真田 久（筑波大学体育系、CORE 事務局長）
   (3) ソチオリンピック・パラリンピックにおけるオリンピック教育プログラムに関する調査報告
   　大林太朗（CORE 事務局）
   (4) 実践報告
   　・附属坂戸高等学校での取り組み
   　渡曾愛梨（附属坂戸高等学校）
   　・附属中学校での取り組み
   　長岡　樹（附属中学校）
   (5) ディスカッション
   　司会：荒牧亜衣（筑波大学体育系、CORE 事務局）
   (6) 講評　引場信治氏（東京都教育庁）

ディスカッションの様子

第６回オリンピック教育フォーラム

筑波大学体育系、CORE 事務局　　村上祐介

第６回オリンピック教育フォーラムは、2015 年２月 24 日に開催された。今回のフォーラムでは、附属学校全教員へのオリンピック教育カリキュラムに関するアンケート調査の報告や、学校の教員を主な対象として開催した「オリンピック・パラリンピック教育　授業づくりワークショップ」の報告など、今年度新たな試みとして取り組まれた活動が報告された。これらの報告から、オリンピック教育を実践する上で必要な教育内容や、進めていく上で課題となっていることなどが議論された。また、実践報告では、附属駒場中・高等学校での実践と、視覚特別支援学校における IOC 委員との交流プログラムが報告された。附属駒場中・高等学校では、駒場の生徒ならではの取り組みが紹介され、また、中学生が取り組んだ内容と高校生が取り組んだ内容を比較することで、教育現場で縦断的にオリンピック教育を実践していくことの可能性が示された。視覚特別支援学校からは、IOC 委員との交流を通して生徒が様々なことを感じ、学んでいく姿が報告された。これを機にオリンピックやパラリンピックに生徒が主体的に興味を持つようになり、有意義な取り組みであったことが示された。

ディスカッションでは、附属学校での取り組みを今後どのように発展的に展開していくかが議題となり、具体的には、11 校の附属学校が横の連携をさらに強化し、様々な校種で連携してオリンピック教育を進めていく必要性が指摘された。

開催概要

1. 日時：2015 年 2 月 24 日（火）17：30 ～ 19：00
2. 場所：筑波大学東京キャンパス文京校舎 1 階 119 講義室
3. プログラム：
   (1) 開会挨拶　　石隈利紀（筑波大学副学長、附属学校教育局教育長）
   (2) 平成 26 年度 CORE 事業報告　　真田久（筑波大学体育系、CORE 事務局長）
   　　今井二郎（筑波大学附属学校教育局教育長特命補佐）
   (3) 実践報告
   　・本校生徒と IOC 委員との交流　　星祐子（附属視覚特別支援学校）
   　・駒場のオリンピック教育　　横尾智治（附属駒場中・高等学校）
   (4)「オリンピック・パラリンピック教育　授業づくりワークショップ」の報告
   　宮崎明世（筑波大学体育系、CORE 事務局）
   (5) ディスカッション　　進行：荒牧亜衣（筑波大学体育系、CORE 事務局）
   (6) 講評　　浅野敦行氏（文部科学省スポーツ・青少年局競技スポーツ課オリンピック・パラリンピック室長）

会場の様子

ディスカッションの様子
左：真田久氏　中：星祐子氏　右：横尾智治氏

オリパラフォーラム 2014

CORE 事務局　　大林太朗

2014 年 10 月 4 日（土）、文部科学省、つくば国際スポーツアカデミー（TIAS）との共催でオリパラフォーラム 2014 を開催した。本フォーラムの目的は、1964 年の東京大会におけるオリンピック学習の内容を振り返り、2020 年大会に向けた教育プログラムの展開を検討することであった。

第一部では、1961 年より文部省が作成した「オリンピック読本」の内容を分析し、小学校社会科、体育科、生活指導等での実践例を踏まえて、1964 年大会に向けたオリンピック学習の特徴を検討した。第二部では、2020 年に向けたオリンピック・パラリンピック教育について、小学校、特別支援、道徳教育等多様な角度から実践例の情報共有がなされた。

ディスカッションでは、とりわけパラリンピック、障害者スポーツに関する内容が議論された。それらの内容は、オリンピック教育における「他者理解」、あるいは国際パラリンピック委員会（IPC）の掲げるパラリンピック教育の枠組みにおいても十分に検討できることが確認された。各都道府県関係者、民間企業からの出席が多くみられ、研究者や学校関係者に限らない、オリンピック・パラリンピック教育の展開に対する幅広い層からの関心の高さが示された。

開催概要

1. 日時　2014 年 10 月 4 日（土）13:30 ～ 16:30
2. 場所　東京国際フォーラム D5
3. プログラム

第 1 部 1964 年のオリンピック教育体験

(1) オリンピック国民運動と教育　　大林太朗（筑波大学研究員）

(2) 各教科でのオリンピック学習　　上田隆司（八王子市立横山第二小学校）

・社会科「平和な社会と日本」

・体育科「友情のメダル、ロードローラーの表現運動」

(3) 生活指導等でのオリンピック学習　　江上いずみ（筑波大学講師）

・1964 年のマナー教育

第 2 部 2020 年オリンピック・パラリンピック教育への展望

(1) 各教科でのオリンピック・パラリンピック教育　　上田隆司（八王子市立横山第二小学校）

(2) 特別支援学校におけるオリンピック・パラリンピック教育について　　根本文雄（筑波大学附属大塚特別支援学校）

(3) グローバルマナー、おもてなし教育として　　江上いずみ（筑波大学講師）

4. 参加者

・一般参加者 91 名

・TIAS 短期プログラム参加者　約 34 名

・ニコニコ生放送　視聴者　約 23000 アクセス

会場の様子

オリンピック・パラリンピック教育授業づくりワークショップ

筑波大学体育系、CORE 事務局　　宮崎明世

2014 年 12 月 21 日（日）、筑波大学東京キャンパス文京校舎にて、「オリンピック・パラリンピック教育授業づくりワークショップ」を開催した。本ワークショップは、CORE のこれまでの活動実績をもとに、オリンピック教育の普及に向けて成果を発信するとともに、学校の教員を中心とした参加者が情報共有や意見交換を行って、参加者がともに活動することで新たな授業づくりのきっかけとなることをねらいとした。

ワークショップの様子

参加者はワークショップに 33 名（教員 21 名、一般 6 名、学生 6 名）、オブザーバーとして 17 名であった。開会の後、オリンピック・パラリンピック教育の授業づくりの事例として、障がい者理解としてのブラインドサッカーの授業事例（長岡樹教諭・附属中学校）、総合的な学習の時間の取り組み（國川聖子教諭・附属中学校）、小学校の取り組みの事例（上田隆司教諭・八王子横山第二小学校）をそれぞれ 15 分程度発表した。休憩をはさんで後半は、校種をもとに 4 ～ 5 名のグループに分かれて、授業づくりのためのグループワークを行った。グループワークは 1 時間 30 分程度で、授業の対象、ねらいと概要を計画し、模造紙 1 枚にポスターを作成して、5 分程度のプレゼンテーションを行うこととした。

グループワークを通して各グループが考えた授業計画の概要を表 1 に示した。それぞれの校種を対象とした授業計画が立てられ、総合的な学習の時間を活用する計画が大半であった。高校生を対象とした授業計画は、「批判的な見方から 2020 年の東京オリンピックを考える」というもので、現在行われている事例はオリンピックの良い面ばかりが強調されているのではないかという懸念に応えるものであった。小学校を対象とした計画では、パラリンピックに関する授業を行い、次世代のリーダーを育てることをねらいとしたもの、運動会やオリンピックフェスティバルというイベントを企画して、イベントに向かって分担して調べ学習やモノづくりなどの活動を行うもの、他国や自国文化の理解を深め、人に伝えることをねらいとするものなどさまざまであった。特別支援学校を対象とした計画は、新聞づくりを通して世界の国を知るというものであった。各グループがポスターを作成して 5 分のプレゼンテーションを行い、参加者全員が投票を行って最優秀賞を決定した。

本ワークショップは、参加者が発表を聞くだけでなく自らが参加して意見を交換し、オリンピック・パラリンピック教育についての理解を深め、授業づくりのヒントとすることをねらいとした。グループワークは、時間が少ない中でのディスカッション、ポスター作製、発表という流れであったが、参加者からはさまざまな立場の人の考えを聞くことができ、有意義であったという意見が寄せられた。

2020 年に向けて、さらにオリンピック・パラリンピック教育のニーズが高まると考えられる。今回のような参加型のワークショップを通して情報を共有し、有意義な授業づくりが進められていくことが望まれる。今回の経験をもとに参加者が各校で教育を実践し、報告し合えるような会を継続していきたいと考えている。

表 1　各グループの指導計画

班	対象	授業形態	ねらい・概要
1	高校1・2年	総合的な学習の時間	批判的な見方から2020年東京オリンピックのあり方を考える。
2	小学校5・6年	総合的な学習の時間	パラリンピックの認知度を高めるための次世代リーダーとして子どもたちを育成し、パラリンピックムーブメントを起こすこと。
3	小学校全学年	総合的な学習の時間／学校行事	オリンピックについて学ぶだけでなく、学んだことを伝える技術を身に付ける。縦断的に学習を継続し、さまざまな観点でオリンピックに関わることができる。
4	小学校6年生	総合的な学習の時間／教科	日本と関係のある国々に関する調べ学習を通して、言葉や習慣を理解し、異文化や自国の文化について学ぶ。
5	小学校全学年	総合的な学習の時間／学校行事	総合的な学習の時間にオリンピックの競技、日本や他国の文化を学んだうえで運動会を見直し、みんなでつくる運動会を目指す。
6	中高	総合的な学習の時間	オリンピックに関する水中運動を通じて、日本の国土・歴史と身体運動の関係を知る。
7	中学3年	教科／体育理論	世界の国々のオリンピック競技にまつわるエピソードを知ることで、世界の国々の現状を知る。
8	特別支援・高校2年	総合的な学習の時間	オリンピック・パラリンピックに関する新聞づくりを通して、世界の国を知ろう。

クーベルタン－嘉納ユースフォーラム 2015

附属高等学校　　中塚義実

1．国内版ユースフォーラムの実施に至るまで

2 年に一度開かれる「国際ピエール･ド･クーベルタン･ユースフォーラム（YF)」に 2011 年（北京)、2013 年（リレハンメル）と筑波大学附属高校の生徒 2 名が参加した。引率者として両大会に帯同し、世界中の高校生がオリンピズムを学びながら交流を深めていく姿を目の当たりにし、「日本でも YF ができないだろうか」と考えた。

関連する諸機関と調整しながら、CORE 主催、特定非営利活動法人サロン 2002 共催、特定非営利活動法人日本オリンピックアカデミーの協力で 2015 年 3 月 13 日（金）～ 15 日 (日)、筑波大学で標記フォーラムを開催することになった。第 10 回国際 YF（ピエスタニィ＝スロバキア）への参加生徒 7 名の選考の場ではあるが、まずは日本の高校生にオリンピズムを学ばせる（感じてもらう）ことが目的である。日本独自のオリンピック教育を国内外に示すという意図は、「クーベルタン－嘉納ユースフォーラム」という名称に込められた。

2．クーベルタン－嘉納ユースフォーラム 2015 の実際

はじめての国内版ユースフォーラムの参加校は、筑波大学附属高校・附属駒場・附属坂戸と、趣旨に賛同した帝京高校、自由学園、中京大学附属中京高校である。男女 15 名、計 30 名の高校生が、さまざまな活動を通してオリンピズムを学び、交流を深めた。初日は学校紹介と「野性の森」での野外活動、2 日目は嘉納治五郎やクーベルタンについての講義、陸上競技場でのスポーツテスト、英語によるグループ討議、最終日はグループ討議の発表と筆記テストと、盛り沢山な 2 泊 3 日であった。誌面の都合で詳細は割愛するが、生徒の様子をみていると、この YF が、参加生徒にとって大変有意義で貴重な経験となったことがわかる。

今後も日本と世界をつなぐオリンピック教育の場として続けていきたい。

スポーツテスト（ウォームアップ）の様子

参加者集合写真

講義の様子

野外活動の様子

日本スポーツ教育学会第 34 回大会参加報告（シンポジウム）

筑波大学体育系、CORE 事務局長　　真田 久

2014 年 10 月 26 日（日）、愛媛大学城北キャンパスにて開催された日本スポーツ教育学会第 34 回大会シンポジウム「オリンピック教育の展開と課題」にパネリストとして登壇し、次の内容の発表を行った。

1．オリンピック教育とは

CORE での定義について説明し、OVEP（Olympic Values Education Programme）という IOC によるオリンピック教育の教材作成プロジェクトにより示された５つのオリンピック価値を教えていくことが、オリンピック教育において重要な内容であるが、それのみならず、世界の社会問題に目を向けて、その解決をはかっていける人材を養成していくことも重要であると説明した。

2．オリンピック憲章（2013 年版）における教育の位置づけ

IOC によるオリンピック憲章（2013 年版）における「オリンピズムの根本原則」において、オリンピズムと教育の関係が書かれていること、および、「オリンピック・ムーブメントの構成と全般組織」（IOC 2013,p.15）の説明の中で、オリピック・ムーブメントの目的は、若者を教育することであることが述べられていることを説明した。

3．東京大会（1964 年）におけるオリンピック学習（千代田区教育委員会）

1964 年当時に行われたオリンピック学習の内容について、当時の千代田区教育委員会作成の指導書に基づいて、紹介した。社会、道徳、国語、音楽、体育（保健体育）などの各教科ごとのほか、学級会活動や運動会における活用などが提示されていたこと、さらには当時のオリンピック学習は、日本人の品位の向上、外国人客に親切に接すること、ユーモアを解する気持ちのゆとりを持つこと、などのように、マナー教育が行われたことも特筆に価する。特に、日本人の品位の向上、外国人客に親切に接すること、ユーモアを解する気持ちのゆとりを持つこと、などのように、マナー教育が行われたことは、特徴的なことである。学校教育や社会教育での展開を考えると、国民に対する一大教育運動であったといえる。

4．長野冬季大会（1998 年）によるオリンピック教育

長野市の小･中･特殊学校 75 校による「一校一国運動」について、その内容を大会前、大会中、大会後の３つに分けて紹介した。

5．筑波大学附属学校における取り組み

筑波大学においては、オリンピック教育プラットフォーム（CORE）のもと、大学と附属学校 11 校によるオリンピック教育が推進されており、その具体的な例として、小学校社会科や中学校、高等学校の保健体育科における体育理論などのように、学習指導要領に基づいて教科の中で行われるもの、学校の行事に関連させて行われるもの、そして総合学習の時間を用いて比較的長い時間行うものなどがあげられる。また筑波大学には特別支援学校が 5 校あり、それぞれの障害に応じた教育がなされているが、これらの学校においても、オリンピック教育が実践されている。スポーツやスポーツ選手は身近に感じている生徒も多いため、彼らとの出会いや触れ合いを通して、さまざまな困難や挫折を乗り越えて今日に至っていることを知ることや、オリンピックに関する学習発表会を通して、自尊心を高められたことが報告されている。特別支援学校における教育的効果は極めて高いことを報告した。

6．2020 東京大会に向けた教育プログラムへの展望

これまでのオリンピック教育の展開から、およそ次のことを考えなければならない。

- 一校一国（1 校 1 NOC）運動の全国的展開
- 大学連携のネットワークによるオリンピック教育の展開（大学、小・中・高校との連携）
- 大学生中心の自主的活動（大学生によるオリンピック・ムーブメントの創造）
- 特別支援学校におけるオリンピック教育の展開と発信（パラリンピック教育の模索）
- ホスト国としてのオリンピック教育

ロンドン大会がボランティアをゲームズメーカーと呼んで成功したように、日本的なボランティア教育のあり方を模索しなければならないであろう。おもてなしの精神や日本文化にはそのヒントがあるように思われる。また日本は、1964 年の東京大会の時から、マナー教育が重視されてきたので、それらを道徳教育との連携で展開することも可能であろう。あわせて日本人自身の日本文化の理解と発信も大切である。このようなことを少しずつ実践して深められれば、次世代のモデルとなる教育プログラムを提示できるのではないだろうか。

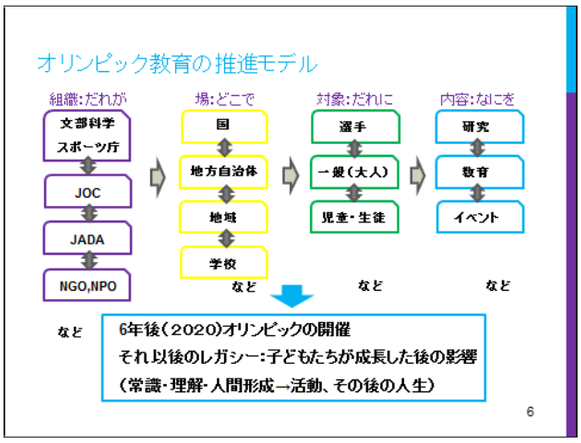
日本スポーツ教育学会第 34 回大会参加報告（口頭発表）

筑波大学体育系、CORE 事務局　　宮崎明世

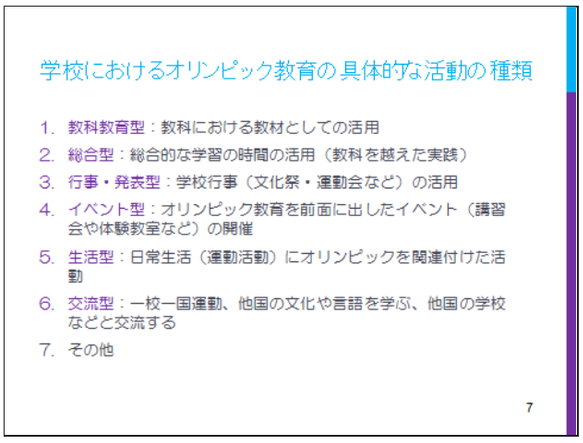
2014 年 10 月 25 日（土）、26 日（日）に愛媛大学において日本スポーツ教育学会第 34 回大会が開催され、「学校におけるオリンピック教育の可能性と展開」というタイトルで口頭発表を行った。本研究の目的は、学校におけるオリンピック教育にはどのような可能性があるかを具体的に検討し、その展開例をこれまでの研究から明らかにすることであった。2010 年から行ってきた CORE の活動の中から、各種の学校で行うことができるオリンピック教育の形態と内容について整理することで、学校現場で実現可能なオリンピック教育について検討した。

まず、オリンピック教育を推進するにあたり、そのプログラムは誰が行うのか（組織）、どこで行うのか（場所・場）、だれを対象とするのか（対象）、何を行うのか（内容）などを明確にする必要がある。これらの要因によってプログラム自体が左右されると考えられる。これまでの実践事例から、学校におけるオリンピック教育の活動の形態は、教科における教材としての活用（教科教育型）、総合的な学習の時間の活用（教科を越えた実践）、学校行事の活用（行事・発表型）、オリンピック教育を前面に出したイベント（イベント型）、日常生活にオリンピックを関連付けた実践（生活型）、他国の文化や言語の学習や交流（交流型）などに分類することができる。発表では、それぞれの形態で行われた以下の事例について説明した。教科教育型では、附属中高の体育理論におけるオリンピック学習の事例と小学校社会科における授業の事例を紹介した。総合的な学習の時間では、附属大塚特別支援学校の事例、附属中学校の障がい者理解としてのブラインドサッカー教室の事例を挙げた。生活型では、附属久里浜特別支援学校の日常的な運動活動にオリンピックを関連付けた事例を紹介した。これまでの実践の中で明らかになった学校種による特徴として、小学校では教科を越えた計画を行いやすいこと、学校全体での行事などに発展させやすいこと、中学・高校では、専科であるために教科ごとの内容を深められること、他教科との連携が必要であるが現実的には困難なこと、社会的な出来事との関連など小学生よりも知識が豊富であることなどがあげられる。特別支援学校では、障がいに合った配慮が必要であることはもちろん、興味を引き付ける上では十分に活用できること、日常生活との結びつきが普通教育で行うよりも重要となることなどがあげられる。

学校におけるオリンピック教育の今後の展開として、全国各地で行われるであろう実践の共有の機会を作る必要があること、2020 年までのビジョンと具体的な計画が必要であること、オリンピック教育を行うための教員の研修が必要であることなどが考えられる。発表に際しては、オリンピック教育に関わる発表は少なく、関心を集めた。



オリンピック教育の推進モデル



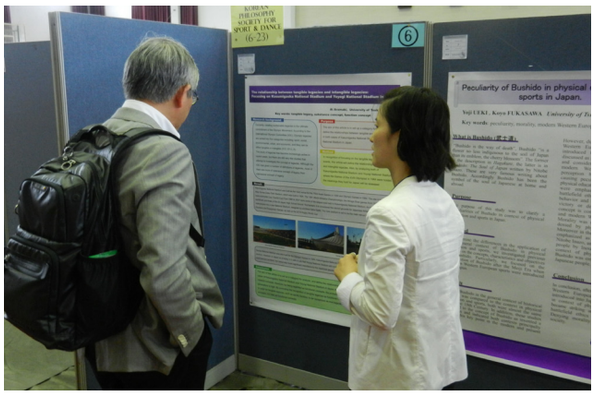
学校におけるオリンピック教育の具体的な活動の種類

国際学会参加報告

筑波大学体育系、CORE 事務局　　荒牧亜衣

1. 1988 年ソウルオリンピック記念 2014 年仁川アジア大会国際スポーツ科学会議

2014 年仁川アジア大会国際スポーツ科学会議は、2014 年 8 月 20 日から 22 日に大韓民国の仁川にある京仁教育大学校を中心に開催された。「Mutual Understanding, Trust, and Respect Among Asians: Can Sport Be the Answer ?」というテーマのもと、基調講演やシンポジウムの他に、15 の分科会においても各種研究発表が行われた。基調講演には、国際パラリンピック委員会の創設者で、終身名誉会長である Dr. Robert D. Steadward が招聘されており、パラリンピック・ムーブメントに関する関心の高さが伺えた。



ポスター発表の様子

2. 国際スポーツ哲学会第 42 回大会

国際スポーツ哲学会第 42 回大会は、2014 年 9 月 3 日から 6 日までの 4 日間、ブラジル連邦共和国のナタールで開催された。今年度は、初めての南米での開催ということもあり、例年に比べ、演題数が少なかったものの、キーノートレクチャーが 4 題、一般発表が 41 題行われた。

オリンピックに関する研究発表のセッションも毎年設けられており、オリンピズムやユースオリンピックゲームを題材とした発表があった。特に、Dr. Mike McNamee（スウォンジー大学）によるキーノートレクチャー「パラリンピズムとバイオテクノロジーの限界」が印象深い。競技力を高めるために何らかの手段をもちいることの境界について、技術の革新やスポーツをすることの本来的な意味合いの観点から報告があった。今はまだ確固たる定義付けがないパラリンピズムの考察においても、示唆に富むレクチャーであった。また、ブラジルでオリンピック教育に取り組んでいる研究者とも交流することができ、日本におけるオリンピック教育の全国展開における課題に関連して、リオデジャネイロ以外の都市でオリンピック教育推進の機運がなかなか高まらないことについて意見を交換した。

3. 2014 年台湾身体文化学会国際大会

2014 年台湾身体文化学会国際大会は、9 月 26 日から 28 日に国立台南大学で開催された。本大会は「Festivals, Sports, Confucianism and Culture」というテーマが設定され、大会最終日には台南孔子廟と国立歴史博物館を訪問する文化プログラムがあった。シンポジウム 2 題、キーノートレクチャー 2 題、一般発表が 33 題行われた。筆者は、1964 年東京オリンピックを事例に、有形と無形のレガシーの関係性についてキーノートレクチャーを行った。台湾のオリンピック研究者とも意見交換することができ、特に東アジアにおけるオリンピック教育の展開の可能性についてディスカッションした。

閉会式にて

発表内容詳細

Ai Aramaki: The relationship between tangible legacies and intangible legacies: Focusing on Kasumigaoka National Stadium and Yoyogi National Stadium in Japan. 2014 Incheon Asian Games International Sport Science Congress, Incheon, 2014. 8

Koyo Fukasawa, Ai Aramaki: Beyond the border and changing public attitudes: Olympic education as intangible legacy. 2014 International Association for the Philosophy of Sport, Natal, 2014. 9

Ai Aramaki: Relationship between tangible and intangible legacies: Focusing on the Games of the XVIII Olympiad in 1964. 2014 International Conference on Festivals, Sports, Confucianism and Culture, Body and Culture Society in Taiwan, Tainan, 2014. 9

実践報告

競い合いながらフェアプレーを学ぶ

附属小学校　　眞榮里耕太

１．競い合うから全力を出す

小学生の子どもたちは、他者と競争することや比較することを好む傾向がある。「前回よりも多く回れた」「○くんに勝った」「○さんより上手になった」などといったような場面が多くある。体育は運動、スポーツを教材として扱うため、常に自分や他の誰かと競争したり、比べたりする機会がある。そのため、子どもたちは必死に取り組む。しかし、常に負けてばかりいると競争することを避けたり、さらには運動、スポーツに取り組むこと自体を嫌いになったりする恐れがある。だからといって運動スポーツから競争することを外してしまうと、一昔前に問題となった「順位をつけない徒競走」「みんなそろってゴール」といった考え方になってしまう。運動・スポーツは競争することだけがねらいではく、全力を出して技能を高めたり身につけたりするという本来のねらいがある。このねらいを達成させたり、同じ運動を繰り返し取り組むための工夫として競争させることがある。

競争することが悪いのではなく、競争のさせ方に工夫が必要なのである。そこで小学校の体育授業では、常に「勝ったり、負けたり」する状況を作り出すようにしている。

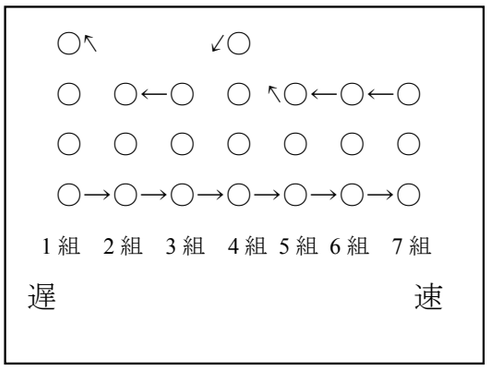
いつでも全力を出さないと勝てない相手と競争するしかけがあるとよい。また、このような取り組みを繰り返していくことによって自分だけがよければいいのではなく「相手がいないと競争ができない」ことが分かってくる。その結果として相手を思いやる気持ちが育ってくる。

２．入れ替え戦方式

小学校では入れ替え戦方式を用いることがよくある。入れ替え戦方式とは、右の図のようにグループの中で勝ったら（１位）数字の大きいグループに移動する。負けたら（最下位）数字の少ないグループに移動して相手を変えて競争する。

何度か競争して入れ替えを繰り返して行くとほぼ同じくらいの力の子（チーム）同士が競争することになる。似たような力同士の競争になるので全力を出さないと勝つことができなくなる。勝ち続けることは容易ではなく、また負け続けるということも減ってくる。勝ったり負けたりすることによってさらに競争することのおもしろさを味わうことができる。

※入れ替え戦方式は、チーム戦だけではなく、個人で行う運動でも使える方法である。



３．新記録を目指す

自分の記録と競い合うという方法もある。タイムや回数などの記録が残せる運動は、ノートに記録しておき、常にその記録を更新することを目指していく。授業の中で新記録を教師が評価することで全力を出すことにつながる。例えば、競争で負けたとしても記録が更新したのであればそれを評価する。他者との競争だけではなく、自分自身の記録と競争することで最後まで諦めずに取り組むことになる。新記録を評価することによって単純にタイムが速い、遅い、回数が多い、少ないという他者との比較ではなく、新たな評価の軸になる。

附属中学校の取り組み

附属中学校　　國川聖子

平成 26 年度の「オリンピック教育」を振り返ると、昨年度より携わる人数も増え、内容についても広がりをみることができた。本校の教育課程は、「教科領域」と「活動領域」の 2 領域で構成されている。前者を「教科学習」と「総合的な学習の時間」とし、後者を「HR 活動」と「実践的活動」と区分して、全ての教育活動を行っている。それぞれの活動を紹介する。

1．教科学習《対象者：2 年生全員》

体育理論の授業：中学 2 年生を対象とした「保健」の内容「薬物乱用と医薬品」から「ドーピングとフェアプレー」について考え、その原点となるオリンピズムと古代オリンピックに思いを馳せる学習を展開した。また、生徒達の興味関心の高かった「道具とパフォーマンス」についても触れた。

2．総合的な学習の時間《対象者：各学年コース選択者 20 ～ 30 名》

（1）2 年生：「スポーツを多角的にみよう」と題して、コースを開設した。オリンピックを通して、様々な視点からスポーツを捉え、スポーツそのものの価値やスポーツを取り巻く環境について考え、私達自身とスポーツとの関わり方を再考し、深めていくことをねらいとした。

〈学習活動〉①オリンピック・パラリンピック新聞の作成［内容例・フェアプレー・平和の祭典・友情のメダル・ボランティア・聖火リレー・オリンピックムーブメント・2020 東京オリンピック・オリンピック旗・モットー・古代オリンピック・パラリンピック・女性とオリンピック・オリンピックと環境問題　等］

②古代オリンピックに思いを馳せる：スタート装置 (ヒュスプレクス) を用いた短距離走：笛の音に合わせての重りを用いた立ち幅跳び

③オリンピック・世界で活躍した方から学ぶ：秋本真吾氏（陸上競技）、大菅小百合氏（スピードスケート・自転車競技）より、実技指導と講演を頂いた。生徒達は、各種目の具体的な練習方法を実践する中で選手の卓越性を実感し、スポーツに取り組む心の在り方を学ぶことができた。（感想後述）

④パラリンピックから学ぶ：ブラインドサッカーに挑戦。ゲストティーチャーとして、ブラインドサッカー協会の講師と選手と、合わせて 2 名に来校頂いた。

（2）3 年生：「スポーツ受送信」と題して、コースを開設した。運動・スポーツ・健康について視野を広げてより深く知り、学んだことを発信し、他者と共有する喜びを得ることをねらいとした。

〈学習活動〉①オリンピック・パラリンピック研究［例・オリンピアンから学ぶ・オリンピックを支えたトレーナーから学ぶ・附属とオリンピック・嘉納治五郎レガシーに学ぶ］

②日本のスポーツ・文化［国際交流で世界へ発信、英語で紹介］　　※特集ページ参照

③スポーツサイエンス　［例・映像による動作分析・筋肉痛実験　等］

④スポーツ舞台の裏側の探検　［JISS・NTC 見学］

3．ＨＲ活動《対象者：1 年生全員》

本校では初の試みとして、学年 205 名での一斉学習を行った。オリンピックを知り、オリンピックを学ぶ意義を知ることをねらいとした。内容は、「オリンピックシンボル」「オリンピックから連想することの共有」「本校元校長嘉納治五郎先生」「クーベルタンとオリンピックモットー」、「フェアプレー」「東京五輪への期待」「自分とのつながりを考える」。オリンピックについて自分の考えをまとめ仲間と共有し合う貴重な時間を持つことができた。今後は、継続した学びの広がりと積み重ねを保障していくことが新たな課題である。

4. 実践的活動

（1）《対象者：蹴球部 1･2 年生》筑波大学インクルーシブ交流教育事業「サッカー・ブラインドサッカー体験」への参加。その目的は、二つあった。視覚障害者と健常者がサッカーの交流を通して互いを理解すること、さらに、違いを超えて共有できるスポーツの良さを考えることである。

（2）《対象者：家庭科研究会 2･3 年生》「大切な人と味わいたい料理」をテーマに、オリジナルレシピの開発に取り組んだ。その名も、「The 日本鍋～ 2020 東京オリンピックで、世界の人と食べたい日本鍋～」。内容は、おせち料理の縁起を担ぎ、福袋にはおみくじの要素を取り入れ、鰹だしのきいた彩り良い鍋に仕上がった。「ジュニア料理選手権　※オレンジページ・(株) 味の素　主催」準グランプリ受賞。

5. 附属中学校としての「オリンピック教育」の拡大の可能性

今年度、教育局を中心に行われた調査においても、保健体育科の開設する授業以外の可能性をみることができた。また、具体的な実践においても、教育活動全般におけるオリンピック教育の可能性を大きく広げることができたと感じている。来年度は、「中学校」として各教科の特徴を活かした実践はもちろん、教科の枠を越えた横断的な実践、課外活動での実践などを整理し、附属中学校としての「オリンピック教育」の実践事例の幅を広げ、さらに充実した学びの積み重ねを提供していかねばならない。

最後に、「オリンピック・世界で活躍する選手から学ぶ」における生徒の感想を紹介する。

〇失敗があるからこそ成功があり、逆に失敗がなければ、成功はない―

せっかくの「失敗」といかに向き合ってより多くのことを学び、成功へとつなげていくかが大切

〇“夢”→なれたらいいな。“目標”→いつ達成する？そのために必要なことは？→行動すること！！

生徒の学びの可能性は無限大である。オリンピック･パラリンピックを契機に私達がどのような教育の機会を創っていけるか。来年度に期待する。

支える方から学ぶ　トレーナー体験

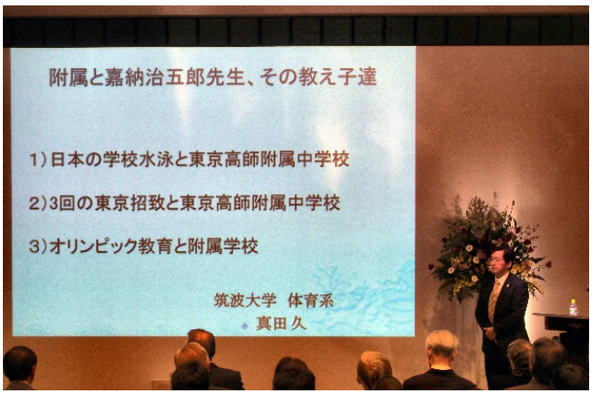
パラリンピックから学ぶ　ブラインドサッカーに挑戦

附属高等学校におけるオリンピック教育の実践

附属高等学校　　浅見道明

1．オリンピック教育講演会

2014 年 12 月 17 日 (水) に桐蔭会館完成報告会が行われ、その講演会で CORE 事務局長である真田久先生に「嘉納治五郎とオリンピック」についてお話しいただいた。明治期の校長であった嘉納治五郎先生と本校卒業生が東京オリンピックを誘致したという話を聞き、在校生も大いに刺激をうけていた。



2．「第 10 回国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラム」につながる「クーベルタン－嘉納ユースフォーラム 2015」の開催と、派遣生徒の事前学習

1）第 10 回国際ピエール・ド・クーベルタン・ユースフォーラムへ向けて

オリンピックやパラリンピックの真のねらいである「オリンピズム」を学び、交流を深める場として 2 年に一度、世界中から高校生約 100 名が集まり､「国際ピエール･ド･クーベルタン･ユースフォーラム」が開かれている。本校は 2011 年の北京大会、2013 年のリレハンメル大会にそれぞれ 2 名の生徒を派遣し、「嘉納治五郎の学校からの参加者」として注目され、高く評価されてきた。

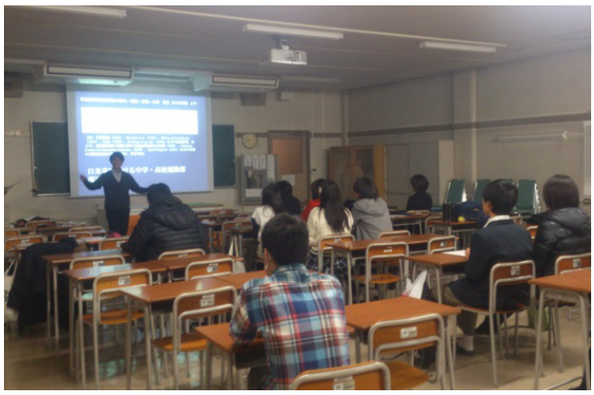
これまではオブザーバースクールとして 2 名のみの派遣であったが、2015 年 8 月 29 日～ 9 月 5 日にスロバキアで開かれる第 10 回大会では、本校を含め、日本から 7 名の派遣が可能となった。同大会へ派遣する 7 名を選考する場として、また日本の高校生が「オリンピズム」を学び、交流を深める機会として、CORE 主催でクーベルタン－嘉納 ユースフォーラム 2015 を開催することになった。

2）クーベルタン－嘉納 ユースフォーラム 2015 の開催と、派遣生徒の事前学習

2015 年 3 月 13 日（金）から 15 日（日）、筑波大学を会場に、全国から高校生約 30 名を集めて、初の国内ユースフォーラムが開催された。内容は、①嘉納治五郎やクーベルタンに関する講義、②オリンピズムに関する討議、③スポーツテストとスポーツ交流、④野外活動などである。

本校では 10 月初旬に、国際ユースフォーラムとともに全校生徒に告知し募集したところ 11 名の参加希望があり、辞退者 1 名を除く 10 名が事前学習に取り組んでいる。

詳細は別稿に譲るが、国内ユースフォーラムに参加する生徒のモチベーションは高い。限られた時間の中ではあるが、11 ～ 12 月には「海外の人に本校を紹介する」ことを主眼に置いて、日本の学校の概要、本校の体育・スポーツ活動、嘉納治五郎の功績についてグループごとにまとめ、12 月 10 日（水）に発表会を行った。ちょうど学校見学で来校された中



学校見学で来校された中学生とその保護者も立ち会った発表会（12 月 10 日）

学生や保護者の方も参観し、よい意味で緊張感のある中での発表となった。

1～2月には「オリンピック･パラリンピックを学ぶ」というねらいのもと、①古代ギリシア、②クーベルタン、③オリンピックの諸問題、④パラリンピック、⑤東京オリンピックについて調べ、順に発表する形式で学習を進めた。またスポーツテスト（100m走、走幅跳び、砲丸投げ、クロスカントリー）の準備も、放課後に何度か集まり進めていった。

３．体育理論の授業の中でのオリンピック教育

本校のオリンピック教育の中核をなすのは、引き続き保健体育科の授業を通してである。特に、鮫島康太、中塚義実、宮崎明世が担当する体育理論の授業では、各担当教諭が工夫を凝らして授業を行うとともに、授業の様子を公開したり、他校に紹介したりしている。

横浜市教育委員会主催の平成26年度高等学校保健体育科研修会にて「体育理論の実践」について中塚が講演（6月26日）し、その中でオリンピック教育の実践についても紹介した。同様にジャーナリストや行政担当者が集まる「スポーツ政策研究会」にて「オリンピック教育の実際」について講演（3月6日）し、12月8日の授業には笹川スポーツ財団、朝日・毎日・読売の各紙から授業参観に来校した。この日の授業テーマは「日本スポーツの発展過程－嘉納治五郎と東京高等師範学校の功績」であった。

オリンピック教育が学校内外で注目されていることを改めて理解する機会となった。

４．スーパーグローバルハイスクール（SGH）として

本校は2014年度より、文部科学省からSGHの指定を受け、全国56校の幹事校としてモデルとなる実践への取り組みを開始している。初年度はグローバルリーダーを育成する「SGHプログラム」を中心に展開しているが､2015年度からは各学年「SGHスタディ」と称する総合的な学習の時間を置き、グローバル社会に資する人材育成を図っている。

SGHスタディの課題の一つに「オリンピック・パラリンピックにおける諸課題」が置かれ、この領域を選択した生徒は、自分たちで課題を見つけ、調べ、まとめ、発表することになる。2～3年次を対象とするグループ研究の成果に期待したい。

ハイジャンプ世界記録の展示

附属駒場中・高等学校　　横尾智治

1．オリンピアン　為末大氏　講演会

本校の保護者主催で、為末大氏による講演会が実施された。タイトルは『ハードルを越える』であった。為末大氏はシドニー、アテネ、北京とオリンピックに 3 大会出場している。初出場したシドニーオリンピックの話や世界陸上で 2 度銅メダルを獲得した経験などお話していただいた。

2．ハイジャンプ世界記録展示完成

この展示は、オリンピックの良さを生徒に伝え、学校の体育・スポーツ、健康文化を高めることを目的とした。

日常的に学校生活を送る場所に、スポーツの世界記録を展示することで、能力の限界に挑戦するスポーツの文化的価値を生徒に認識してもらいたいと考えた。

また、IOC が 8 歳から 18 歳までを対象に作成したオリンピックの価値教育プログラム：OVEP(Olympic Values Education Programme)

『5 つの教育的価値「努力する喜び (Joy of effort)」、「フェアプレイ (Fair play)」、「他者への尊重 (Respect for others)」、「卓越さの追求 (Pursuit of excellence)」、「身体、意志、心の調和 (Balance between body, will and mind)」』

を解説盤に掲示することで、世界に広がっているオリンピックの普遍的な価値観があることを見る人が知るきっかけとしたい。

来校者に対しても、体育・スポーツ、健康文化について情報発信でき、外国人にもわかるように英語表記とした。

ハイジャンプの展示ができることで本校の体育・スポーツ、健康文化の構築のために役に立つと考えている。

ハイジャンプ世界記録の展示

MEN'S HIGH JUMP WORLD RECORD
2.45m
BOYS' HIGH JUMP JAPAN RECORD OF SENIOR HIGH SCHOOL
2.23m
BOYS' HIGH JUMP JAPAN RECORD OF JUNIOR HIGH SCHOOL
2.10m
WOMEN'S HIGH JUMP WORLD RECORD
2.09m
GIRLS' HIGH JUMP JAPAN RECORD OF SENIOR HIGH SCHOOL
1.90m
GIRLS' HIGH JUMP JAPAN RECORD OF JUNIOR HIGH SCHOOL
1.87m

Olympics Values Education Programme
[Joy of effort]　[Fair play]　[Respect for Others]
[Pursuit of excellence]　[Balance between Body, Will and Mind]

This exhibit presented by Centre for Olympic Research & Education
2013.10.10

展示の解説盤

生活の場にオリンピックの展示がある

附属坂戸高等学校のオリンピック教育の取り組み

附属坂戸高等学校　　渡會愛梨

本校は総合科学科高校であり、生徒の個性や進路に応じた主体的な学習を可能にするために多彩な選択科目を開設し、それらを学習の目標や系統性によって科目群を配置しているのが特徴である。また、本校はキャリア教育にも力を入れており、多くの体験や学習から将来の自分を探し、夢の実現に向けた取り組みも行っている。平成 26 年より SGH に認定され、国際的に活躍できるグローバル・リーダーの育成にも力をいれている。そこで、今年度は科目「国際社会」でオリンピック教育を進めていった。

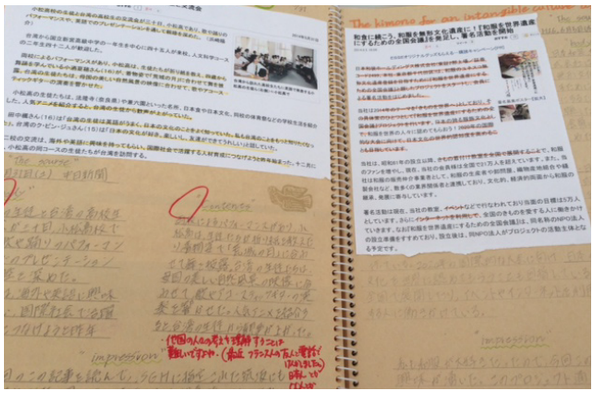
1．科目「国際社会」

授業内容

1 学期：外国を知る

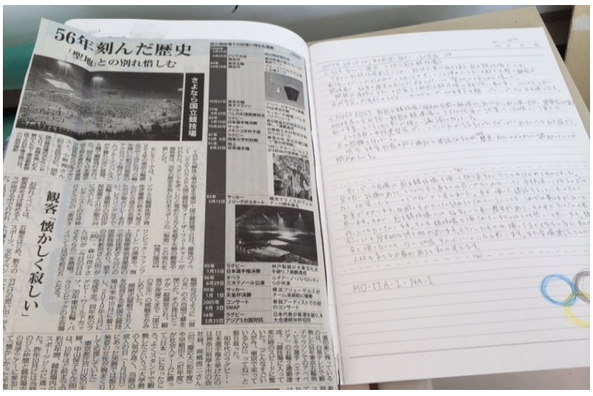
2 学期：国際的課題について考える①

3 学期：国際的課題について考える②



写真①

「国際社会」の担当教員は英語科、国語科が担当し、多くの視点から世界の人々や文化などの関わりを意識しながら基礎的な知識や能力を養う授業である。自分の意見や考えを英語で発信したり、あるいは英語で発信された内容を理解し、自分の思考に取り入れたりしていくことである。キーワードは『私を知り、社会や世界とつながる』である。まずは授業を進めていく中で課題として、興味・関心を持っている分野についての情報を収集し、それをノートにスクラップして内容の要約及び感想を書くというものである（写真①②）基本的には日本語での要約をし、感想を書く生徒が大多数であるが、数名、英語の要約文を付けた生徒にはボーナスポイントとして評価を付けることがあった。上記の写真は「オリンピックと〇〇」というテーマで書いている生徒である。写真①は「オリンピックと服装（ユニフォーム）」。写真②は「オリンピックと歴史」という各自でテーマ設定を行い取り組んでいた。3 学期にはグループごとに国際的課題をテーマとしての調査・考察を深めその内容を英語でプレゼンを行った。1 月 22 日に CORE から大林氏を本校に招き、生徒が疑問を抱いている、「東京オリンピックによる産業発展」や「おもてなし」に関して質疑応答を行った。当初は 1 時間のみを計画していたが、多くの質問に答えて頂き 2 時間という長い時間、とても充実した講義になった。（写真③）



写真②

写真③

リオデジャネイロパラリンピック・東京パラリンピックを目指して

附属視覚特別支援学校　　寺西真人

ここでは、本来ならば学校の中で、授業や課外活動・クラブや様々な経験を通してオリンピックの精神や歴史や社会的背景を学ぶ事を書かなければならないのだが、あえて自分と生徒達がパラリンピックを目指している様子を紹介したいと思う。

2014 年には、年間 7 回の国際大会に参加をした。そのうち６回は海外遠征であった。

水泳が 3 回、ゴールボールが 3 回である。一人で２つの競技に関わっている事が問題なのだが、直ぐに代わってもらえる人がいないのも事実であり、どちらも 20 年以上関わってきた成り行き上仕方の無い事だとも思っている。

遠征は、1 本、約 1 週間から 10 日間の遠征になるので、同僚達には負担増が多く迷惑をかけてしまった 1 年間であった。筑波大学から配慮を頂いたが、足りるものではなかった。

2020 東京オリパラに向けて、今後も続くことが予想される。指導者を育成する事、また指導者の増員なども重要な課題である。

ゴールボールでは 6 月にアジアパラゲームの予選会と、2016 リオの出場権のかかった世界選手権の２大会があった。6 月のアジアパラの予選会は中国の杭州に行き、男子・女子共に本選の切符を獲得し、11 月のアジアパラゲームでは、男女ともに銅メダルという結果を残した。世界選手権は 2013 年に切符を獲得していたが、女子は 4 位、男子は予選敗退という結果で、残念ながらまだリオの切符が無い状況である。

本校関係の参加選手は在籍生徒 1 名、卒業生 6 名であった。2015 年に最終切符を獲得する為に練習を続けている。

水泳は 4 月に 2 週連続でイギリス・グラスゴーとドイツ・ベルリンで大会に参加をした。

今年行われる世界選手権と同じ会場で、プール状況・気候・時差・食事面など、切符のかかった大会にどこまで良い環境が作れてサポート体制を取れるか下見を含めた意味合いと長期に渡る大会の体調維持管理の練習を兼ねてであった。この様な経験は必ず、本番で成果が出されるものと信じている。もう 1 回は、仁川のアジアパラに参加した。ブラインドの選手が大勢参加したのでタッピングをするスタッフが不足して養成を兼ねてコーチとして参加させて頂いた。参加国が増え、大会のレベルが向上し、支援学校のクラブの延長上では、参加資格が取れず、公的機関や大学や企業からの配慮・支援がなければ手が届かない状況である。ブラインドの選手の半数以上が本校在籍生・卒業生である。

本校高等部 2 年生に、長野という男子の水泳選手がいる。中学 2 年生から自分と水泳を始めた。当時は、まだ、泳ぐだけであったが、高等部に入学してからは、それなりに練習を積んできた。高校 1 年生の時に、アジアユースパラゲームのマレーシア大会に参加した。

2014 年は、アジアパラゲーム、仁川大会に参加できるまで成長した。現在は 2015 世界選手権の代表に選ばれる様に、日々練習をしている。目標は来年のパラリンピックでは無く 2020 東京を目指している。パラリンピック選手のレベルに達するまでに 5 年から 10 年のトレーニング期間が必要になる。自分は限りなく練習に付き合っている。

しかし、時々、ふと思う。国内で行われる大会もあるのだが、大会会場が学校の近くでも友人や職員の応援が無い事である。一緒に参加している選手は、観客席から（盲学校の生徒なので、スタンドからプールは、まして泳いでいる選手は見えないが）大声を出し、声援している。やはり、日頃一緒に練習をしている仲間だからだろうと思う。

普通校の大会はどうなのだろうと、思ってしまう事がある。

2020 年、東京でオリンピック・パラリンピックが開催されるが、心配事が多い。

会場の問題もそうだが、自分の立場だと、日本代表のパラリンピックの選手が、何人参加出来るのだろうか。昨年のこの冊子にも触れたが、個人種目は、出場枠があり、国内でトップでも、世界ランキングの上位でなければ参加できない。また、団体競技は、ホスト枠があるので、参加が出来るが、世界のトップレベルとどこまで対等に競い合えるのかも心配な要因でもある。しかし、自分の心配はもっと別で、選手は頑張って育てるとして実際に応援をしてもらえるのだろうか…、ということである。

昨年ブラインドサッカーの世界大会が国内で開催された。多くのメディアが取材をし、ニュースでも映像を目にした。自分

はネット中継を見ていた。日本戦こそ、半分以上スタンドが埋まっていたが（正直、かなり羨ましいが本音）その他の試合は、スタンドはガラガラ状態であった。日本戦に応援が大勢いることも羨ましいと述べたが、他のパラスポーツの大会の観客席は、いつもガラガラである。これが現状である。

最近国内で心のバリアフリーという言葉が聞かれるようになった。視覚障害の関係者の立場からだと、盲導犬がレストランに入れないとか、駅の点字ブロックが黄色い線と呼ばれその内側にというアナウンスがあるが、視覚障害の人は点字ブロックの上しか歩けないとか、街中の歩道にある点字ブロックの上に平気で自転車など停めるとか、マナーを含めた問題が聞こえてくる。知らないからであると思われる。知っていればそんなマナーの悪い日本人ではないと信じたい。今の大人より、学校に在籍している生徒・学生の方に知らすことが出来れば、体験できれば、自然体で吸収してくれるのでは思っている。現に本校と普通校との交流会を年数回行うが　交流会の途中からは、生徒達は視覚障害だからという心のバリアは感じられなく、同じ年齢の知人・友人として会話をしている。知るきっかけがあれば、それで良いとも思える。

ゴールボール・水泳とも在学生は夕方から夜にかけて卒業生と一緒に練習をしている。

在学生には、夜遅い時間で申し訳ないと思うこともあるが、先輩達との人間的なつながりや、アドバスをもらったり悩みを相談したりと社会性の向上につながっている。卒業生達は卒業後、何故後輩達と練習をしに戻って来るのか、考えて頂きたい。本来なら進学先の大学で指導されたりするのだが、視覚障害スポーツは特殊な要素が多く、指導者が少ないというのが実情である。また練習場所の確保も容易では無く、結局集まって練習するスタイルが本校では定着している。競技によって異なるかも知れないが、学校に来ないと練習が出来ない・指導者がいない、が残念ながら正しい表現だと思われる。ならば学校で選手を育成すれば良いではないか、と良く言われるがそんな設備も無く、夏は 40 度近い体育館で練習している状態でもある。

今後 2020 東京オリンピック・パラリンピックに向けて、まず学校現場・関係者が、ハンディを抱えて、克服しながら、工夫しながら練習している選手達の様子を知って欲しい。そして子供達や周囲の人達に伝えてほしい。オリンピックの練習などは、よくメディアでも取り扱われているがパラリンピックは情報量が少なく（以前より増えたが）まだ知られていない。また健常者も一緒に練習できるものも多くある。そんな機会を増やし、大会で身近な選手の応援をして、東京オリンピック・パラリンピックを迎え、選手共々盛り上がって行けたらと願っている。その為には選手達も、自分達が、日々行っている事や大会など競技以外の部分でも社会に発信していく役割も必要になり発信する側の自覚を持っていかなければならない。見る側、見られる側、応援する側、応援される側が共存・一体化していければ、2020 東京オリンピック・パラリンピックは成功するのではないだろうかと考えている。長野パラリンピックの後、各駅にエレベーターが設置されるようになり、また公共の施設ではスロープが設置され、車椅子ユーザーが街中に多く見られるようになった。東京パラリンピックの後、どんな東京になるのか、どんな日本になるのかと考えるとワクワクする。また、そうなれるように日々、教育現場では子供たちにスポーツの楽しさを、また、選手の指導者として　競技以外の見られる人間として　恥ずかしくない選手を育てて行きたいと思っている。

附属聴覚特別支援学校の取り組み

附属聴覚特別支援学校　　苦瓜道代

インタビューの様子

本校で行っている活動や行事は、「努力」,「他者に対する尊敬の念や友情」,「フェアプレイの精神」,「国際理解」といったオリンピックの理念に合致するものが多く実践されている。

例えば、各部が、様々な形で近隣の学校や附属校との交流を行い、海外からの参観者を受け入れている。また、練習を重ね、小学部では市の水泳大会、中学部・高等部ではそれぞれの運動部が聾学校大会，障害者スポーツ大会，そして地区や県大会等に出場している。そして、実際に技術指導をしてもらう機会として、小学部ではプロバスケットボールチーム日立サンロッカーズ東京によるバスケットボール教室、高等部陸上部は筑波大学陸上部との練習会という機会がある。本校の幼児・児童・生徒にとっては、特に視覚情報が重要な役割を果たすので、一流選手の動きを見ることのできる技術指導の機会を増やしていければと考えている。

今年度は、高等部２年生の計画により、2013 年ソフィアデフリンピックに女子バスケットボール代表として出場された鈴木裕加（すずきゆか）選手へのインタビューが実現した。以下、その内容を紹介する。

本校では、毎年 11 月に文化祭が行われている。幼稚部・小学部は作品展示、中学部・高等部・専攻科は学年毎に教室の展示や体育館のステージ発表を行い、保護者主催のバザーや卒業生主催の喫茶店もあり、公開日には多くの人が来校している。

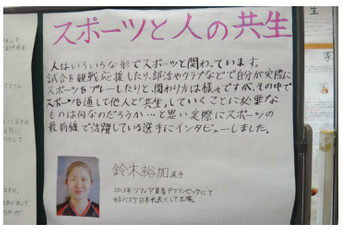
高等部２年生のあるグループは、「スポーツと人の共生」をテーマに展示を作ることに決めた。パソコンや本で調べるだけでなく、自分たちと同じ聾者のスポーツ選手という視点からバスケットボールのデフリンピック代表選手に直接話を聞いて、展示の内容を深めようと考えた。何故、バスケットボール選手をターゲットにしたかというと、聾学校にはバスケットボール部がある学校はなく（以前はあったようだが）、バスケットボールをしているということは、聴覚に障害がありながらも聴こえる人と一緒に部活動をしたり、地域のクラブチームで活動したりした経験があり、聴覚障害者と健聴者が一緒にプレーする際の苦労や工夫といった話を聞くことができると考えたからである。

そして、日本デフバスケットボール協会のホームページに掲載されていたメールアドレスを通じて連絡を取り、7 ～ 8 回のやりとりの後、実際に 2013 年ソフィアデフリンピックに出場された鈴木裕加選手へのインタビューが実現することとなった。

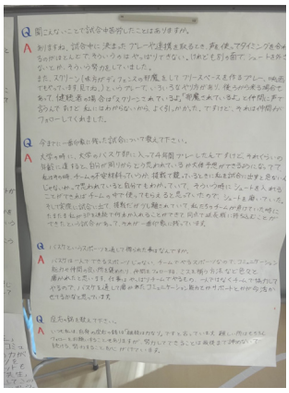
鈴木裕加選手は、現在、製薬会社に勤務されており、一児の母でもある。小学校 6 年生から地域のバスケットボールクラブに入り、大学まで部活動を続け、現在は地域のママさんチームとデフチームでプレーされている。「声でタイミングを合わせるプレーは難しいが、シュートを決められればチームに必要な存在になれると思い、シュートを磨いてきた」,「分からないことはそのままにせず、友達や顧問の先生に質問し、ノートに書いて貰って、理解するようにしてきた」,「バスケットボールはチームプレー。一人ではできないので、話し合いを通してコミュニケーション力が磨かれた。また、プレーを通して人の良いところを褒める力やフォローする方法などを身に付けることができた」などの話から、生徒は声を使えないので聾者と健聴者が一緒にプレーする際には大きな壁があることを感じたが、努力することで可能性が広がること、そしてお互いに歩み寄ることの大切さも実感したそうだ。

また、「代表選手は、強化合宿の参加者から監督が選ぶが、強化合宿には希望した人が参加できる」,「合宿や遠征費は自己負担」,「ソフィア大会では、女子バスケットボールは 6 位に入賞したので費用がかなり国から貰えたが、男子は全敗だったので半分しか費用が返ってこなかった」などのデフリンピックに関する話からは、オリンピックに比べデフリンピックの知名度が低いことや、聾者がデフリンピックを目指すには費用や時間の問題があり競技を続けて行くには限界があると感じたそうだ。

昨年度の文化祭でも、デフリンピックに関することを調べ、展示を作った生徒がいた。生徒にとっては、オリンピック選手よりデフリンピック選手の方が身近な存在であり、興味・関心があるようだ。今後も、本校の幼児・児童・生徒の実態に合った内容・活動を探っていきたい。



文化祭の展示①



文化祭の展示②

附属大塚特別支援学校におけるオリンピック・パラリンピック教育の実践報告

附属大塚特別支援学校　　根本文雄

1. はじめに

本校では、2012 年のロンドン夏季オリンピックから、全校でオリンピック・パラリンピック教育に取り組んでいる。校務分掌でも、附属学校や特別支援教育研究センター等の渉外部門としての「オリンピック教育推進委員」が設けられている。そのメンバーを中心に「国際教育研究」や「体育」担当の教員等の協力のもとに、合同朝会（本校の全校集会。週 1 回、小学部から高等部までが参加する）を中心に取り組んできた。また高等部では、2012 年に「ロンドンオリンピックの感動を伝えよう！」のテーマのもと、オリンピックを題材とした「総合的な学習の時間」を展開し、年間を通して取り組んだ。

2. 本年度（2014 年度）の取り組み

（1）ソチオリンピックの報告会

筑波大学附属大塚特別支援学校における、本年度の取り組みを報告する。本年は、昨年度から連絡をとっていた新田選手や筑波大学にコーチ学を学びにこられた杉本選手をご招待することを中心に計画した。また、「生のオリンピックの感動」を児童生徒に分かりやすく伝える為にソチオリンピックの視察報告をすることや、オリンピック選手を身近な存在に感じる事ができるように将来のオリンピアンたちを紹介する機会も企画した。

9 月 17 日に新田選手が本校に交流にきてくださることが決まったことを受け、9 月 3 日の合同朝会でソチパラリンピックの報告をすることとなった。その内容は以下の通りである。

① 実際に競技を見て、選手のがんばりに感動したこと
② 勝ち負けを超えて、相手を讃え合う、オリンピック精神に感銘をうけたこと
③ 様々な出会いに感謝 … a. ロシアオリンピック国際大学への訪問
　　b. ソチ市第１５番ギムナジウムへの訪問、交流
　　c. オリンピックパークでの地域の紹介ブースや運営ボランティアとの交流
④ 視察のまとめと提言 … a. 表示・案内について
　　b. バリアフリーについて
　　c. 文化的プログラム（博物館）の紹介と提言

報告会の様子

（2）新田選手との交流会

新田選手との交流会は、全校行事として取り組むこととなった。石隈附属学校教育長も参加してくださった。その準備は、高等部３年生と１年生を中心に「生活」（生活単元学習）の中で行った。以前に行ってきた、大塚祭での「総合的な学習の時間」での取り組みの経験と、個別教育計画上の目標から生徒それぞれの取り組む役割を決め、２時間（１時間—５０分）の枠で準備を行った。

生徒達は、式次第に基づき司会の原稿をパソコンでうつ係、インターネットを使って検索した情報を基に新田選手を紹介する係などに取り組んだ。この他にも、花束や色紙のプレゼントを用意する係が花屋さんに注文をするための原稿をメモにまとめて話す練習をしたり、装飾係が校内に新田選手の来校を告げるためにポスターや歓迎のボードを作ったりするなど、それぞれが自分の役割を果たす中で、主体的に交流会に参加しよう、盛り上げようという雰囲気が芽生えてきた。

役割分担と調べ学習

歓迎ボート制作

花束の購入

9 月 17 日当日は、11 時 30 分ころ来校していただき、玄関で歓迎のセレモニーを行ったあと、生徒と一緒に給食を食べていただいた。第 1 部の交流会では、全校生徒が参加して交流会を行った。その中で、歓迎の言葉や新田選手の紹介、プレゼント授与などすべて生徒が主体的に運営しおこなった。メインの新田選手の話は、とても生徒達にわかりやすく、いつも以上に真剣にきいている生徒が多かった。

《新田選手が伝えてくれた言葉》
1．挨拶をしっかりしよう！
2．使う物や道具を大事にしよう！
3．会社や社会のルールをまもろう！
4．あきらめないで頑張り続けよう！
5．感謝の気持ちを忘れずに！

（3）まとめと今後の課題

2015 年 2 月 26 日には、柔道の銀メダリストの杉本選手と主に卒業する高等部 3 年生への激励をかねての交流会を予定している。こうした本物のオリンピックの選手と交流活動は、本校の幼児児童生徒たちに非常にわかりやすい取り組みといえる。

これまでもそうであったが、オリンピアンがもたれている「ストーリー」を生徒自身が自分のことに置き換えて考えてみる。そこから自分の課題に気付き、解決策を考え、実践し、今度は「自分が頑張ったこと」を周りの人に伝える。すると、「生徒が伝えたこと」を見て、聞いた友達や先生、保護者から評価される。こうしたことが生徒自身に「生きる自信」を与え、たくましくなってきたように感じる。

『本物との出会いに感謝！』今後も継続していきたい。

附属桐が丘特別支援学校のオリンピック教育の取り組み
～学校行事における取り組み～

附属桐が丘特別支援学校　　小坂桂子

当校でのオリンピック教育は、保健体育、社会等の各教科や道徳、総合的な学習の時間、特別活動において、児童生徒の実態に応じて行われている。これらの取り組みを積み重ねていくなかで、児童生徒からさまざまな声を耳にするようになった。例えば、小学部の児童からは「2020 年の東京オリンピックまでに、公共交通機関や様々な施設が、自分にとっても選手や応援の方々にとっても、もっと使いやすいものになってほしい」、「車いすを利用しているけれど、健常者と同じスペースで東京オリンピックを見たい」といった発表を耳にした。また、中学部・高等部の生徒からは、「東京パラリンピックに選手として出場したい」、「ボランティアやカメラマンとして参加したい」という目標も聞かれるようになった。2020 年の東京オリンピックが意識され、児童生徒がオリンピックに主体的に関わっていこうとする想いが、少しずつ高まってきているように感じられる。

今年度は、学校行事での取り組みを２例紹介する。

１．運動会における取り組み

当校の運動会は、在籍する児童生徒の実態に差があるため、本校と施設併設学級で分けて実施している。ここでは、10 月に行った本校の運動会における取り組みを紹介する。

本校の運動会は、小学部・中学部・高等部の児童生徒が合同で紅白 2 チームに分かれ、勝敗を競っている。競技は、児童生徒の実態に合わせた種目を学部別に実施している。毎年熱戦をくり広げており、第 50 回を数える今年度も、最後の種目まで勝負の行方がわからない展開で盛り上がった。

今回様々な種目のなかから取り上げて紹介するのは、小学部 1・2 年生の集団種目「Flag Of The World」である。これは五輪や国連の旗のほか色々な国の旗を、児童 1 人 1 人が 1 枚ずつリレー形式で自分のチームのロープまで運んで取り付け、万国旗を作り上げるという競技である。制限時間内に多く旗を取り付けたチームが勝ちとなる。

この「Flag Of The World」で使用した国旗の種類は、日本はもちろんのこと、アメリカ、隣国の韓国や中国といった比較的よく目にする国旗のほか、アジアのネパールやベトナム、アフリカのケニア、ルワンダ、モロッコといった国々の国旗が使用された。これらの国の国旗が使用された背景には、当校に研修等で訪れた海外の方との交流がある。今年度、当校には 25 か国から見学・研修・交流のため海外の方が訪れたが、小学部 1・2 年児童はその半数近くの国の方々と交流してきた。その際には、事前に来校者の出身国に関する情報（挨拶の言葉、地理上の位置、食事など）や国旗の確認を行ってきた。

このように運動会という行事の基盤には日常における学習や体験があり、そのことが競技に取り組む児童の動機付けにも大きく働いていた。

２．桐が丘祭（文化祭）における取り組み

本校の学校祭（桐が丘祭）は、小学部の学習発表会と中学部・高等部による文化祭とで構成されている。今回は、高等部の取り組みに焦点を当てて紹介する。

本校高等部では、例年、生徒たちが自発的に考える企画が互選によって 4 つ選ばれ、希望するパート別に分かれて活動している。その中の 1 つとして昨年度から「スポーツ」パートがつくられ、障害者スポーツの体験コーナーを開設している。このパートは、保健体育の授業で行っている競技だけでなく、これまで自分たちが知らなかった競技や興味のある競技などを取り上げることにより、自分たちが障害者スポーツに対する理解を深めると共に、障害者スポーツを多くの方々に知ってもらうことを目的に発案された。

活動は、自分たちで様々な障害者スポーツの競技について調べることから始め、桐が丘祭でそのまとめを発表すると共に、来場者に実際に体験してもらうコーナーを運営するという内容である。昨年度は保健体育の授業でも行っている「ボッチャ」と「スラローム」、今年度は「スラローム」と「サウンドテーブルテニス」の 2 つの体験コーナーを行った。

昨年度も取り上げた「スラローム」は陸上競技種目の 1 つで、旗門の置いてあるコースを、車椅子もしくは電動車椅子で走行する種目である。旗門（筒形）は、白・赤 2 色の区別と配置で、前進、後進、そして 8 の字走行を見分ける目印である。この旗門の色や配置が表す意味を理解し、旗門に接触しないように進まなくてはならない、という点にこの競技の難しさがある。日頃保健体育の授業で取り組む生徒たちにとっては、馴染みのある競技であるが、その難しさを理解してもらうには体験して

もらうのがよいということで選ばれた。

もう１つの「サウンドテーブルテニス」は、今年度のスポーツパートの生徒から、これまで自分たちが行ったことがない競技や肢体不自由以外の障害者スポーツについても興味の幅を広げたい、という提案から新たに取り入れることになった。この競技は主に視覚障害のある方が取り組んでおり、音の鳴るボールを使用し、ネットの下を転がして打ち合う競技である。プレーヤーはアイマスクを着用するので、ボールの音を頼りに打ち合うことになる。この競技を取り上げるに当たっては、附属視覚特別支援学校にご協力いただき、借用した用具で実際に生徒たちが競技を体験することから始めた。生徒たちは、体験して「音でボールの動きを感じとることの難しさ」を実感し、サウンドテーブルテニスの選手のすごさを皆口にした。

桐が丘祭当日は、多くの来場者に集まっていただき、「スラローム」と「サウンドテーブルテニス」を体験していただくことができた。参加者からは「車椅子の操作が意外と大変」、「簡単だと思っていたが、実際に行うと難しい」といった感想が聞かれた。また、生徒たち自身が実感したように「音を聞いてボールの動きを追うのは大変」という声も多く聞かれた。しかし、同時に競技することの楽しさも味わってもらうことができ、障害者スポーツ体験コーナーは２日間盛況のまま終えることができた。

この活動を通して、生徒たちは参加者に障害者スポーツについて理解を深めると共に、自分たちが行っているスポーツを多くの方に知ってもらう機会となった。

以上に紹介した２例は、当校のオリンピック教育の一部を紹介するものだが、学校の教育活動全体のなかで児童生徒のオリンピックに対する意識や意欲は、少しずつ高まってきているように感じている。今後も、様々な場面で児童生徒にオリンピックの精神や国際平和について児童生徒が積極的に考えられるような指導の実現に努めていきたい。

←小学部１・２年生とアフガニスタン研修生との交流の様子

教室後方の万国旗のイメージが、運動会の集団種目に活かされた。

←本校運動会
小学部１・２年種目
「Flag Of The World」の様子

←桐が丘祭
障害者スポーツ体験コーナー「スラローム」の様子

床に配置された筒状のものが旗門

附属久里浜特別支援学校のオリンピック教育の取り組み

附属久里浜特別支援学校　　河場哲史

本校は知的障害を伴う自閉症の子どもたちを対象とした学校であり、幼稚部と小学部のみの学校である。このような学校の実態から、本校ではオリンピック教育の目的を次のように位置づけている。

・健康の保持増進のために、体を動かすことに関心をもつこと
・身近なスポーツを通して手足の巧緻性や操作性を高めること
・競技のルールを理解し、他者と一緒に楽しめること

具体的には、オリンピックを関連付けながら、日々の運動活動の指導に当たることで、幼児児童の運動へのモチベーションを高めたり、少しでもオリンピックを身近に感じたりできるように配慮をしている。子供たちは、今までの学習の積み上げから、オリンピックというものを少しずつではあるが意識できてきているように思われる。今年度の実践の幾つかを次に紹介する。

①朝の運動（高学年マラソン等）：メダルや賞状をもらえることを励みにして、更なる運動への意欲を換気した。また児童によっては、練習を重ねることで、以前の自分の記録と比べて記録が伸びたことを喜んだり、努力を継続することの大切さを学んだりすることができた。今後は、これらの取り組みを運動習慣につなげ、心身の健康促進になればと考えている。

②体育の授業：体育の授業でも、モチベーションを高めるための手段としてメダルや症状を用いた。それらに加えて、小集団で運動ゲームをする際に競技のルールやマナーの指導も行っている。

③神奈川県特別支援学校体育連盟主催の陸上大会、駅伝ランニング大会に参加：小学部の希望者が大会に参加した。大会本番に向けて練習を積み、自分にとってのオリンピックに参加するという意欲付けを行った。駅伝ランニング大会では参加した高学年児童３名が自分自身の持てる力を存分に発揮し、それぞれ５位、８位、９位という結果を修めることができた。結果に対する満足感を得ることはもちろん、来年に向けての目標を新たに設定することができた。

本校のオリンピック教育は、まだまだ試行錯誤の段階で、毎年見直しをしながら行っている。日々の教育活動にオリンピック教育の味付けを行うことで、より意欲的に活動できるようにしていきたいと考えている。幼児児童の実態を考慮しながら、今後も指導の機会を増やしていきたい。

大学におけるオリンピック教育
筑波大学における全学共通の総合科目としての教育実践について

筑波大学体育系　　嵯峨 寿

１．授業のねらいと概要

より多角的にオリンピックをとらえられる学習機会として 2003 年に開講、以来 12 年目となる今年（2014 年）は、昭和 39 年の東京オリンピックから数えてちょうど 50 年の節目である。そして、2020 年大会がもたらす新たなレガシーへの関心が高まっていることもあり、授業では、前回の東京大会はじめこれまでの大会やレガシーを振り返り、2020 年大会には何が望まれるか、受講者がそれぞれにビジョンを抱けるよう計画した。

２．各回の講義について

（1）4 月 14 日「東京から TOKYO へ」（嵯峨寿　体育系）

今年のテーマ、授業のねらいを解説し、また、各回の講義とテーマとの関連を説明するなど、授業に臨むに当っての動機づけ、学習意欲の喚起を図った。

（2）4 月 21 日「古代オリンピック」（真田久　体育系）

近代オリンピックを創始したクーベルタンが憧れた古代オリンピック、その原点と本質に遡り、2020 年東京大会の開催理念などを吟味する手がかりとした。

（3）４月 28 日「オリンピアン」（山口香　体育系）

レガシーの語り部であり象徴的存在でもあるオリンピアンの実態や影響力に触れ、社会において期待される役割、自覚すべき使命・責任とは何かを示唆した。

（4）5 月 12 日「スタジアムと都市」（渡和由　芸術系）

新・国立競技場の計画が話題となっている中、海外の都市計画におけるスポーツの活用事例などを参考に、東京五輪施設に期待される多面的役割を示した。

（5）5 月 19 日「東京とオリンピック」（清水諭　体育系）

1964 年大会に関わる施設建設と関連事業に着目し、首都としての東京の構築に作動したナショナリズムの痕跡を探った。

（6）5 月 26 日「ユースオリンピックの挑戦」（福井烈　JOC 理事）

ユースオリンピック大会開催の経緯と理念、参加した日本選手の様子などに触れ、オリンピックがめざす理想と現実とのギャップを浮き彫りにした。

（7）6 月 2 日「芸術競技と文化プログラム」（太田圭　芸術系）

1964 大会を含むこれまでのオリンピックにおける芸術界の取り組みを知ることで、国家事業としてのその広がりと圧倒的なスケールを確認した。

（8）6 月 9 日「東京オリンピックへの道程」（後藤光将　明治大学）

2020 年大会と 1964 年大会、さらには 1940 年大会の東京招致活動を対比させ、ターゲットや戦略の違いほか、当時の国際情勢や国内状況を見渡した。

（9）6 月 16 日「シンボルにみるオリンピック」（成瀬和弥　体育系）

IOC パートナー企業にみられる五輪マーク活用など、オリンピック・シンボルの商業的利用にみられる実例と問題点について掘り下げた。

（10）6 月 23 日「パラリンピック入門」（齊藤まゆみ　体育系）

1964 年に東京で始まったパラリンピックの次なる展開を視野に、現在直面している様々な問題について確認した。

（11）6 月 30 日「期末試験」

「学生による授業評価アンケート」ならびに期末試験を実施した。試験問題は、授業で扱われた重要と思われる基礎知識に関する４者択一問題が 25 問（25 点満点）、所定の到達目標に関わる論述問題が 1 題（同 15 点）。これに毎時のミニレポート 50 点（５点× 10 回）、出席点 10 点（１点× 10 回）を合算して成績評定を行ったところ、A 以上 26%、B 37%、C 27%、D ９%であった。

３．次年度の課題など

芸術系教員の協力により、まさしくオリンピズムが掲げる「スポーツと文化（芸術）、教育の融合」の一端を体現できた。時機に適った名称を冠した科目とあって履修希望者は例年同様定員をはるかに上回り、受講者選抜を行い 150 名（うち 1 年生 113 人）に制限したがその合理的方法の確立が必要である。授業中のスマホいじりが絶えず、月曜午前のせいか惰眠も目につく。学習意欲を喚起しその維持・向上の取り組みが増々求められている。

特別寄稿

オリンピック・パラリンピック教育の可能性
—2020 年東京大会に向けたレガシー構想の視点から—

筑波大学体育系、CORE 事務局　　荒牧亜衣

1．はじめに

2020 年に東京で開催される第 32 回オリンピック競技大会（The Games of the XXX Ⅱ Olympiad）と第 16 回パラリンピック競技大会（Tokyo 2020 Paralympic Games）は、2020 年オリンピック・パラリンピック競技大会（以下、2020 年東京大会）として、一つの組織委員会によって準備・開催される [1]。各々の大会を主導してきた国際オリンピック委員会（International Olympic Committee、以下 IOC）と国際パラリンピック委員会（International Paralympic Committee、以下 IPC）は、特に 1980 年代後半から、双方の組織的な連携を模索してきた [2]。その結果、2001 年に IOC と IPC は、パラリンピック競技大会を開催することはオリンピック競技大会を招致する要件に自動的に含まれることに合意した [3]。2002 年ソルトレイクシティ大会からは、一つの組織委員会がオリンピック競技大会とパラリンピック競技大会の開催の運営を担っている [4]。これ以後、パラリンピックは「もうひとつのオリンピック」として積極的に位置づけられるようになり、オリンピック競技大会との連続性が広く認識されるようになった。

オリンピック競技大会の招致に関しては、2008 年大会の招致活動から新たな方式が採用されている。大会の開催都市は、開催年の 7 年前に選定されることがオリンピック憲章に定められおり [5]、開催都市となるためには、招致ファイルと呼ばれる開催概要計画書を作成し、IOC に提出するよう義務づけられている。この大会招致システムにおいて、近年非常に重視されている概念として「レガシー」がある。開催都市は、招致活動を行う段階から「オリンピックが何をもたらすのか」という視点に基づき、レガシーを構想することが求められるようになった。開催概要計画書は、大会を契機として生み出されるレガシーを宣言するマニフェストとしても位置づけられるであろう。

レガシーは、競技会場等の建築物から生活インフラの整備にとどまらず、国民・市民としての誇り、文化に対する気づきや認識、環境への配慮など、有形、無形を問わず、多様に存在する。現在、レガシーというと、2008 年北京大会のメインスタジアム建設や 2012 年ロンドン大会の東ロンドン地区の再開発など、スポーツ施設の整備や大規模な都市開発が注目されやすい。2020 年東京大会も例外ではなく、メインスタジアムとして計画された新国立競技場は、大会のレガシーとして話題を呼んだ。しかしながら、こうした有形のレガシーは、大会の招致、開催を契機とした重要なレガシーとして指摘できるが、その他の国際的なスポーツイベントにおいても構想されうるものである。近年レガシーという用語は、ワールドカップやコモンウェルスゲームズ、国体といった様々なスポーツイベントの文脈においても使用されるようになった [6]。一方で、オリンピック・パラリンピック競技大会のレガシーについて、その独自性を積極的に打ち出していくためには、その大会理念やビジョンを鑑み、大会の意義を国内外に印象づける開催都市ならでは内容が求められる。

本稿では、レガシーに関する以上の議論を踏まえ、2020 年東京大会に向けたレガシー構想の視点から、オリンピック・パラリンピック教育の可能性について考察を試みる。まず、双方のムーブメントの相違点や共通点を探るために、その歴史的背景について整理する。次に、特に IOC と IPC が提案するオリンピック教育、パラリンピック教育の目的やその背後にある理念について検討することによって、レガシーとしてのオリンピック・パラリンピック教育のあり方について提言する。

2. オリンピック・ムーブメントとパラリンピック・ムーブメント

オリンピック・ムーブメントは、周知の通り、ピエール・ド・クーベルタンの提唱により、1894 年に IOC が設立され、1896 年に第 1 回となるアテネ大会が開催されたことを起点として今日まで拡大してきた。オリンピック・ムーブメントとは、「オリンピズムの価値に鼓舞された個人と団体による、強調の取れた組織的、普遍的、恒久的活動」[7] であり、その最高機関である IOC によって推進されるものである。オリンピズムの解釈については、現在もさまざまな議論があるが、その目的は「人間の尊厳の保持に重きを置く平和な社会を奨励することを目指し、スポーツを人類の調和の取れた発展に役立てること」[8] にある。IOC は、その 100 年以上にわたる歴史の中で、2 つの世界大戦、冷戦、人種問題、あるいは、過度な商業主義や勝利至上主義、環境問題やドーピング、テロといった数々の課題を抱えながら生き残ってきた。最近では、2014 年 12 月に行われた IOC 総会で、Olympic Agenda 2020 というオリンピック・ムーブメントの将来戦略も採択されており、現在も残る多くの課題に積極的に取り組んでいく方針が示されている。

他方、障がいをもつアスリートのためのスポーツは100年以上前から存在しているといわれている。1948年にイングランドのストークマンデビル病院において、ルードウィッヒ・グットマンによって開催された脊髄損傷した人々のためのスポーツ競技大会は、その発展において重要な契機となった。IOCによれば、1952年に開催されたこの大会から、オランダの競技者が参加し、現在、パラリンピック・ムーブメントとして知られるようになった国際的なムーブメントが生まれた[9]。その後、1960年に第1回パラリンピック競技大会がローマ（イタリア）で開催され、23カ国から400人のアスリートが参加した[10]。また、1976年には、第1回冬季パラリンピック競技大会がエーンシャルドスピーク（スウェーデン）で開催された。IPCが現行のような国際的な統括組織として設立されたのは、1989年のことである。2003年に行われたIPC総会では、パラリンピック・ムーブメントの究極の目的を示すビジョンと長期的な目標を計画したミッションが採択された。パラリンピック・ビジョンには、「パラリンピック・アスリートがスポーツの卓越さを勝ち取ることを可能にし、世界を鼓舞し、奮い立たせる」ことが示されており、パラリンピック競技大会の運営、各国パラリンピック委員会の活性化やIPC委員の支援、スポーツの機会均等と財政的支援、パラリンピック・ムーブメントの推進に関わる教育、文化、調査研究活動の奨励がそのミッションとして掲げられている[11]。

両者の接点は、上述のように、特に1980年代以降から密接になり、現在では、双方の大会の運営を一つの組織委員会が担うことが取り決められている。グットマンが開始した脊髄損傷した人々のためのスポーツ競技大会は、世界的に拡大するパラリンピック・ムーブメントを巻き起こし、結果的に、スポーツを通じた教育によって社会変革を試み、世界平和を希求したクーベルタンの理想を追い求めるオリンピック・ムーブメントに出会うことになった。ここにオリンピック・パラリンピック競技大会が成立するわけであるが、正式な連携が明文化されたのは2000年代に突入してからのことである。大会自体は一つの組織委員会によって運営されるものの、異なる歴史をもつ二つの団体がそれぞれの大会運営を主導している現状において、課題は依然として多く残っている。

3. オリンピック・パラリンピック教育の可能性

これまで、オリンピック教育、あるいは、パラリンピック教育という名称の教育プログラムは、IOC、IPCが提唱するモデルを参考に各国の教育制度、歴史的背景、社会状況に適応させる形式をとりながら、数多く展開されてきた。例えば、オリンピック教育については、IOCが提案する代表的なものとして、オリンピックの価値を教えることを目的としたOlympic Values Education Programmeがある。ここでは、オリンピズムの教育的価値（Joy of effort, Fair play, Respect for others, Pursuit of excellence, Balance between body, will and mind）に基づき、オリンピズムを通した教育のアプローチがさまざまな形で示されている[12]。また、パラリンピック教育についてIPCは、その目的に関して「障がいをもつ人に対する配慮や理解を生み出す教育システムに、パラリンピックの理想と価値を調和させること」と説明している[13]。

日本では、特にオリンピック教育について、ドイツ、ニュージーランド、中国、ギリシャ等の事例がすでに紹介されている[14]。また、日本の高等学校における実践もわずかではあるが報告されており、2020年東京大会開催決定後は、関連するプログラムが着々と進められている。パラリンピック教育に関する国内の事例はほとんど報告されていないが、オーストラリアパラリンピック委員会では、パラリンピック教育プログラム[15]が、カナダでは、カナダパラリンピック委員会のスポンサーであるPETRO CANADAによってパラリンピック・スクールプログラム[16]が展開されている。

現在、2020年東京大会に関連して、文部科学省や東京都教育委員会を中心に提案されているオリンピック・パラリンピック教育という名称のプログラムは比較的新しい試みといってよいだろう[17]。双方のムーブメントの歴史的背景の相違からも明らかなように、各教育プログラムは異なる目的を持つものであり、それぞれの意義や教育効果が期待されることからも、個別に位置づけられることが常であった。しかしながら、近年では、大会自体が一つの組織委員会によって運営されること、また、大会がもたらすレガシーを重視する傾向が強まったことを受けて、特に大会に関連した教育プログラムにおいて、オリンピック教育、パラリンピック教育のそれぞれの要素を融合した内容がみられるようになった。例えば、2012年ロンドン大会において展開されたGet Setは、英国オリンピック委員会（British Olympic Association, BOA）と英国パラリンピック委員会（British Paralympic Association, BPA）による青少年向けのプログラムとして実施された。ここでは、オリンピック、パラリンピックそれぞれの価値に基づき、Team GB、Paralympics GBを盛り上げるために、大会自体が学習や参加のための重要な機会として位置づけられた[18]。

2020年東京大会のレガシー構想の観点から考えてみると、大会の開催をそれぞれのムーブメントの連携の出発点と位置づけた上で、より一体的な教育プログラムの展開が望まれることは間違いない。このことは、オリンピックとパラリンピック、各々の競技大会の連続性を考慮するだけでなく、日本におけるスポーツを通じた教育のアプローチを再考するためにも有効であると考えられる。上述の通りに、オリンピック教育、パラリンピック教育という名称のプログラムはすでに展開されており、異

なる目的を持ち、それぞれに対応する教育効果を期待されている。これらの実践は、図 1 に示すように、各々のムーブメントに裏打ちされたモットーや価値を背景として行われていることを配慮しなければならない。

図 1　オリンピズムの理解に基づく教育プログラムのイメージ図

一方で、オリンピック教育、パラリンピック教育の理念には、その方向性に共通する点も多々見受けられる。例えば、オリンピック教育における重要な指針であるオリンピズムの教育的価値には、他者理解の要素は必要不可欠なものとして位置づけられている。また、パラリンピック教育の目的には、「障がいをもつ人に対する配慮や理解を生み出す教育システムに、パラリンピックの理想と価値を調和させること」が示されているが、このことは、あらゆる人へのスポーツの機会を保証することを目指すオリンピズムにおける、特に Sport for All の理念にも合致するものである。オリンピズムにおけるこのような考え方は、現在の国際的なスポーツ団体の組織的な連携の限界から、「パラリンピック」という文脈では取り上げることが難しいデフリンピックやスペシャルオリンピックスを含む多様なスポーツを通じた教育あり方について、共通の土俵で取り上げることも可能にするものであろう。

現在、世界各国で試みられているオリンピック教育、パラリンピック教育は、IOC、IPC によって示されるシンボル的な意味合いをいかに解釈し、ムーブメントの推進に貢献するようなプログラムとして実施できるかがその要点となっている。したがって、2020 年東京大会のレガシー構想の観点から、大会を通じた教育プログラムの可能性について議論する際には、オリンピック教育、パラリンピック教育それぞれが視野に入れる教育内容を個別に保証しつつ、この二つを含有した上位の理念としてオリンピック・パラリンピック教育をとらえていく必要があると考えている。

4. おわりに

互いに異なる教育プログラムを包含する理念として、オリンピック・パラリンピック教育をとらえていくためには、おそらく、オリンピズムをより深く理解することが有効であろう。オリンピズムは、どちらかというと、オリンピックのみに適応される概念として捉えられる傾向であるが、「人生哲学」という言葉に示されるように、そこには人間の生き方そのものへの問いかけが存在する。西欧的な価値観による思想であるとの批判もあるものの、その解釈については、クーベルタンも指摘する通り、文化や時代に応じた意味づけが保証されている [19]。2020 年東京大会のビジョンやコンセプトを踏まえ、今一度オリンピズムの理解を深めながら、オリンピック・パラリンピック教育のあり方について議論を重ねることが要求される。

注及び引用参考文献

[1] 東京オリンピック招致委員会（2013）開催概要計画書 , p.128.

[2] IPC によれば、障がいをもつアスリートのためのスポーツには 100 年以上の歴史がある。IOC との協調を目指した動きは、IPC が設立された 1989 年以前にもみられるが、1988 年に開催されたソウルパラリンピックがオリンピック組織委員会によって、オリンピック競技大会と明確に関係付けられたことによって加速する。1988 年ソウル大会、1992 年アルベールビル冬季大会からは、オリンピック競技大会と同じ会場で行われている。IPC web サイト及び日本パラリンピック委員会 web サイト、IOC web サイトを参照。http://www.paralympic.org/the-ipc/history-of-the-movement（accessed 2015-1-7）, http://www.jsad.or.jp/paralympic/what/history.html（accessed 2015-1-7）, http://www.olympic.org/content/olympic-games/paralympic-games/?tab=paralympic-games（accessed

2015-1-7）

[3] 2000 年には、当時の IOC 会長であったファン・アントニオ・サマランチと IPC 会長であったロバート・D・スチュワードによって、双方の連携について「オリンピック開催国は、オリンピック終了後、引き続いてパラリンピックを開催しなければならない」ことが合意された。日本オリンピック委員会 web サイト参照。http://www.jsad.or.jp/paralympic/what/history.html（accessed 2015-1-7）

[4] IOC web サイト　Paralympic Games 参照。http://www.olympic.org/content/olympic-games/paralympic-games/（accessed 2015-1-7）

[5] IOC（2013）Olympic Charter, p.59.

[6] 例えば、2012 年に開催された FIFA 主催の U-20 女子サッカーワールドカップ日本大会の公式ホームページでは、男女各年代の様々なワールドカップを世界各地で開催している活動に関連して、次のように説明している。「その目的は選ばれた代表国同士の白熱した試合だけでなく、開催国の発展への寄与やその国にサッカー文化を根付かせることも目指しています。この試みを“レガシープログラム”※ 1 と定め、大会ごとに様々な取り組みを行っています。 ※ 1 レガシーとは、『後に残される財産』のこと。ワールドカップ開催を通して、サッカー文化の発展・普及への財産を残したいという意が込められています。」http://www.jfa.or.jp/fu20wwc/legacyprogramme/programme/（accessed 2015-2-20） また、Andrew Smith（2007）.From 'Event-led' to 'Event-themed' Regeneration: The 2002 Commonwealth Games Legacy Programme, Urban Studies. 44, pp.1125-1143. 他、関本ゆう、木村和彦（2010）. デモンストレーションとしてのスポーツ行事に見る国体のスポーツレガシー , スポーツ産業学研究 . 20(1), pp.131-138. のようにコモンウェルゲームズや国体についてのレガシーについて調査する研究も散見される。

[7] IOC（2013）Olympic Charter, p.10.

[8] IOC（2013）Olympic Charter, p.10.

[9] IOC web サイト　Paralympic Games 参照。http://www.olympic.org/content/olympic-games/paralympic-games/（accessed 2015-1-7）

[10] IPC web サイト　Paralympics - History of the Movement 参照。　http://www.paralympic.org/the-ipc/history-of-the-movement

[11] ここまで、IPC（2003）IPC Handbook, p.2 を参照し、筆者が和訳、要約を行い、整理した。

[12] IOC web サイトを参照。http://www.olympic.org/olympic-values-and-education-program（accessed 2015-02-20）

[13] IPC web サイトを参照。具体的な手段としては、「パラリンピック・スポーツについての知識と意識を高めること、体育や身体活動を含めた実践的な導入によりよい理解を生み出すこと、障がいをもつ人々のための異なるスポーツの概念について伝えること、障がいをもつ人々のためのスポーツの方法を増やすこと、障がいをもつ個人に対する見方や態度の変容を促すこと、パラリンピック教育についての調査・研究活動を促進すること」が挙げられている。http://www.paralympic.org/the-ipc/education（accessed 2015-2-20）

[14] 国立情報学研究所が運営する日本国内の論文検索サイト CiNii Article において、「オリンピック教育」をキーワードとして検索した場合、19 件の論文を確認できる。http://ci.nii.ac.jp/search?q=%E3%82%AA%E3%83%AA%E3%83%B3%E3%83%94%E3%83%83%E3%82%AF%E6%95%99%E8%82%B2&range=0&count=20&sortorder=1&type=0（accessed 2015-2-20）

[15] オーストラリアパラリンピック委員会パラリンピック教育プログラム web サイトを参照。児童や生徒、教師がオーストラリアのパラリンピアンについて学び、パラリンピック・ムーブメントや障がいをもつ人について学ぶプログラム。http://www.paralympiceducation.org.au/teachers/welcome-pep（accessed 2015-2-20）

[16] PETRO CANADA web サイトを参照。児童や生徒が障がいをもつ人々やパラリンピック競技大会やパラリンピック・スポーツについて学ぶプログラム。PETORO CANADA は、カナダオリンピック委員会のスポンサーも務めている。http://retail.petro-canada.ca/en/olympics/5612.aspx（accessed 2015-2-20）

[17] 文部科学省は、2014 年 10 月 4 日に「2020 年に向けてのオリンピック・パラリンピック教育」というテーマでオリパラフォーラム 2014 を主催している。文部科学省 facebook ページ参照。https://www.facebook.com/mextjapan/posts/864139673611117?comment_id=864259326932485&offset=0&total_comments=3（accessed 2015-2-20）また東京都教育委員会は、2014 年 10 月から 2016 年 3 月までの予定で、東京のオリンピック・パラリンピック教育を考える有識者会議を設置している。東京都教育委員会 web サイト参照。http://www.kyoiku.metro.tokyo.jp/press/2014/pr140917b.html（accessed 2015-2-20）

[18] Get Set web サイト参照。https://www.getset.co.uk/about-get-set/get-set（accessed 2015-02-20）

[19] クーベルタン自身も指摘している通り、「オリンピズムは一つの体系ではなく、一つの精神状態である。それは様々なアプローチによって深い理解が可能であり、排他的に独占しようとする一つの民族や一つの時代のものではない」Pierre de Coubertin（1918）. Olympic letter Ⅳ : Olympism as a state of mind, IOC. Pierre de Coubertin Olympism selected Writings. Lausanne, IOC, p.548. Letter olympique IV, in: La Gazette de Lausanne, no. 319, November 22, 1918, p.1.

TIAS & AISTS 短期プログラム海外研修生との国際交流

附属中学校　　長岡 樹

Ⅰ．はじめに

世界の人たちとスポーツやオリンピック・パラリンピックを題材として交流がしたい。国際交流で発信し意見交換をして世界の国々の人たちの生の声を聞きたい。そして交流を通して世界のスポーツ文化を理解し、視野を広げたい。

その実現をうかがっていて、まず外国人に来てもらうことを考えた。海外に出ていくことは実際として厳しい。時間的・財政的な課題を考えると、容易には実現できない。本校に海外の方をお招きして、生徒が日本のスポーツ・文化について調べ、発信することを通して、人とつながり世界とつながる機会をつくりたい。そしてスポーツやオリンピック・パラリンピックがもたらす力や役割について考えることで、国際理解や平和意識につなげたい。そういった理由から国際交流に行きついた。

以下に報告する内容については、2014 年 6 月から 2015 年 1 月に行われた３年総合学習の保健体育コースにおいて実践したプログラムの一つである。

Ⅱ．当日の様子

2014 年 10 月 2 日午後に短期プログラム海外研修生世界 21 か国（American, Australian, Belarusian, British, Chinese, German, Greek, Indian, Indonesian, Japanese, Mongolian, Dutch, Omani, Slovakian, Slovene, South Korean, Sri Lankan, Swiss, Taiwanese, Turkish, Ugandan）からなる約 40 名が来校された。

１．開会レセプション

中庭での全校生徒による開会のレセプションでは、音楽研究会生徒の演奏や交流会委員生徒の歓迎ボード、そして代表生徒の英語と日本語での挨拶によって、研修生へおもてなしをもって暖かく歓迎した（写真 1）。

写真 1　開会レセプション

表 1　2014 年 10 月 2 日の全体プログラム

1	12：55 ～ 13：05 開会レセプション（全校生徒）
2	13：10 ～ 14：00 5 時間目　挨拶、発表Ⅰ部（保健体育コース）
3	14：10 ～ 15：00 6 時間目　発表Ⅱ部（保健体育、英語コース）、まとめ
4	15：00 ～ 15：40 能の舞見学
5	16：00 ～ 17：00 柔道体験

２．総合学習保健体育コースでの交流授業

研修生は、３年総合学習保健体育コース 19 名と 5・6 時間目の授業に参加した。

このコースでは、事前学習の 6 時間（2 時間続きを 3 回）を含め授業の目的を、

①日本の体育・スポーツやその文化を調べ、世界へ発信すること

②国際交流で異文化を理解すること

としてこの交流授業を迎えた。授業は大きく発表Ⅰ部と発表Ⅱ部の 2 つに分けて展開した。

（1）発表Ⅰ部

5 時間目は司会生徒の進行の下で、生徒による挨拶から始まり、発表Ⅰ部に続いた。ここでは、10 グループが発表時間 5 分（50 分）として全体の前で発表した。テーマについては、体育やスポーツの日本の特徴といえる内容とした（表 2）。発表する言語については、日本語を入れながらも、これまで学んだ英語をフル活用して発表していた。また実際に相撲のまわしを締めて取り組みを披露したり（写真 3）、柔道の技を見せたりして、その場は大いに盛り上がりを見せた。すべてのグループが発表を終えて、休憩に入った。そのときも実際に相撲のまわしを締めてあげる（写真 4）など、楽しく交流していた。

表 2　発表テーマ

①日本の運動会（2 人）　②本校の運動会（2 人）　③本校の部活動（2 人） ④スポーツ研究～日本が誇る世界の最先端～（2 人）SWUMANOID ⑤相撲（2 人）⑥柔道～嘉納治五郎～（2 人）＊⑤⑥はデモンストレーションあり ⑦日本のアスリートⅠ（3 人）⑧日本のアスリートⅡ（2 人） ⑨パラリンピック（3 人）　⑩東京 2020（2 人）

写真 2　発表Ⅰ部①

写真 3　発表Ⅰ部②

写真 4　休憩中

写真 5　発表Ⅱ部①

（2）発表Ⅱ部

6 時間目の発表Ⅱ部では、Ⅰ部で発表した資料を各グループブースで掲示して、そこで補足説明や意見交換を行った（写真 5）。生徒には多くの研修生と交流してもらいたかったので、研修生には各ブースに自由に動いてもらった。それは、発信して外国人と接することを通して、改めて日本の体育･スポーツや伝統文化について考える機会が設けられて理解を深めることができる。また、日本と外国との違いや同じであるところを理解することができる。ここは、そのようなことをねらいとして時間と場を設定した。

この時間には 3 年総合学習の他コースである英語コースの生徒 25 名も参加した。ここでは、本校生徒と海外研修生が 1 対 1 になるくらいの人数比であり、本校の発表会場の雰囲気から、まるで海外のとある場所にいるような感覚であった。21 か国からなる約 40 名という様々な国の人たちが集い、次から次へと異なる国の人たちが自分たちのところにやってくる。生徒にとって、日本と海外の一国という関係だけではなく、多くの国という関係であることから、日本と海外の国々、海外の国々どうしという比較もできたのではないかと考えられる。

実際において、本校生徒は笑顔、身振り手振りを加えて何とか伝えようとしていた。テーマに関して研修生の国と比較した内容の意見交換をしており、相互に理解を深めようとしていたことがわかる。また本校のこれまでの運動会記念バッヂのプレゼントを企画していたグループがあった。記念バッヂはその年のスローガンを中心にデザイン化されたものであり、漢字一文

字で示されている。研修生は漢字に興味関心が高く、特に今年度のものが人気であった。

３．放課後

放課後には、研修生に日本の伝統文化を味わってもらった。本校の生徒とその父親による能の舞が披露され、一部の生徒と研修生が鑑賞し（写真 6）、その後、希望者と研修生は武道館で礼法、受け身、投げ技など約 1 時間にわたり柔道で交流した（写真 7）。

写真 6　能の舞

写真 7　柔道交流

Ⅲ．成果　～交流授業で学んだ保健体育コースの生徒による感想・アンケートから～

以下に示してある感想は、交流後に保健体育コースの生徒が得たことや学んだことをまとめたものである。それをいくつか示したい。感想から多くを学んだといえる。

Q - A．発表会を通して世界の人たちと交流した者として、同級生や下級生、家族、先生方に得たことや学んだことを伝えるとしたら、内容も含めてどんなことを伝えますか。

○知っているつもりになっていた日本武道など知らないことばかり。
○外国の人が日本に対して抱いているイメージは案外実の姿とかけ離れていたりする。「日本人は家では着物を着ているのか」と聞かれた。そう思い込んでいたらしい。実の姿を知ってもらうことも必要だと思う。
○「殆どの人が毎日柔道をしている」「みんな着物を持っていてよく着ている」など、日本特有の文化について、今の私たちの生活にある以上のイメージを持っていた。その逆もあるのかな。
○外国には運動会という行事はなくて、その行事のためにスローガンを使ったりすることはない。
○外国人は漢字が好き。漢字の意味を知りたがっていた。
○曖昧な返事をしたら、相手との話がつながらないこともわかった。スポーツという一つのテーマだけでも会話が驚くほど広がるし相手の国のことも知れる。
○レポートや調べ学習の発表というと、ネットや本で得た知識をまとめて話すだけで終わってしまいがちだが、世界では更に、「自分は何を体験したのか」「自分はどう思うのか」ということを求められている気がする。
○相撲は他の人からみると、途方もなくおかしなことらしい。
○国によって、盛んなスポーツや捉え方は違うけれど、スポーツが好きならば、国という壁を乗り越えて、共に楽しい時間を過ごすことができるということ。
○「スポーツは国を越えて愛されている」だからこそ「スポーツは世界をつなぐことができる」という“スポーツの力”。スポーツという共通の話題によって、国や言語の壁を越えて楽しく交流できた。
○スポーツは世界共通の言語。アイスホッケーについて話題がでて、それについて分からなかったが、「スポーツ」という大きな括りの中では、どんな種類のスポーツかはあまり関係ない。
○英語を使って会話する楽しさも学ぶことができた。日本語同士で今回の発表会が行われても充実感や楽しさは半減だったと思う。言語が違うからこそ、分かり合えたことや通じ合えたことがすごく嬉しかったし充実したものに感じられた。
○日本には古くから伝統的な文化が多く残っているということが、外国人から聞いて分かった。その文化を未来へ残すことが大事。また、伝統を重んじながらも新しいことを導入する。

Q - B．日本らしいところや他国と異なるところを主張できましたか（Yes No ）

NO と答えた生徒
○スポーツに関しては多くのことを語り合えたけど、日本の良さや誇りに関してのアンケート結果（2020 東京オリンピック・パラリンピックについて、同年代の生徒から回答してもらった）について、あまり触れられなかったから。
○日本の選手の紹介はできたが、自分でもあまり違いを把握しておらず、主張できなかった。
○日本のことは調べることができたが、外国のものについて調べる時間がなかった。

Q - C．自分の課題

生徒が感じている自分の課題
○日本のスポーツについて知らないことばかりなので、勉強したい
○自分から進んで日本の文化について話したり、質問したり、声かけできなくてもったいなかった
○コミュニケーション力。もじもじせずに積極的に話していればもっと楽しかった
○日本語の意味を理解して表現できるように（大和魂について説明できなかった）
○調べたこと以外、答えられなかった
○調べたことをまとめたり、発表したりするだけでなく、それに自分の考えを加えて発表できるようにすること
○調べたことを体験したり、実際に見たりして、それから伝えるべき
○もっと英語が使えないと深いところまで話せないことも痛感した
○英語ができなかったこと
○英語が下手でも、とにかく話す

表 3　アンケート結果

	全　体		II　部	
項　目	楽しかった	充実した	テーマに沿って	日本主張
平　均	4.47	4.41	4.06	YES 11 名
S　D	0.51	0.51	0.56	NO 6 名

（回答は 17 名）

表 3 は、保健体育コースの生徒が自己評価をした結果で、５段階で評価するものと Yes か No で回答をしたものである。まず、5・6 時間目の授業全体を通して「楽しかった」、「充実していた」という項目について、回答は４・５のみであり高い評価を示していた。

理由は、「日本のことを伝え、外国のことまで学ぶことができた」という交流の中身について、そして、「違う文化を持った人たちとの交流ができてともてためになった」、「自分が大好きなスポーツという分野でいろいろな国の人と語り合えるというとても貴重な体験ができたから」という大勢の外国人との交流の機会そのものをあげていたものも多かった。

また、「他の人たちの発表を聞くことで新しいことを知ることができたから」、「他チームのも勉強になった」というコース内で他のグループ発表内容や方法について自分たち自身もコース内の仲間から学んだことをあげていたことも多かった。事前学習では自分のテーマについて調べることが精一杯であったため、他のグループについて具体的にどのような内容なのかわからなかったからである。

デモンストレーションを行ったグループに対しては、写真や映像ではなく実際に見せることで研修生により興味をもってもらえたのではないかという感想をもった生徒が多くいた。

他にも、「海外の人とスポーツの伝統について話し合うことでスポーツをもっと好きになるきっかけになった」、「興味関心の

あることを、自分たちで調べて発表できたから」、「英語の学習にもなった」などあげていた。

４をつけた一人は、『発表内容が全てきちんと伝わったのかどうか疑問に感じる場もあったのでそういう理由から充実さに欠けると思う』と５ではなく４をつけた理由として述べており、自分に厳しく評価を下していた生徒もいることがわかる。

発表Ⅱ部においては、「テーマに沿った話ができたかどうか」という問いに対して２人が３を、それ以外の生徒は４･５であった。そのため、平均が「楽しかった」、「充実した」という項目より低くなった。また、「日本らしいところや他国と異なるところを主張できましたか（ Yes　No ）」という問いについては、大凡３分の１は No と回答している。その理由をＱ - Ｂでいくつか示した。

生徒自身が評価した課題について、Ｑ - Ｃで挙げた。感想やアンケートから、生徒は全体として、体験して学んだことを学校生活や日常生活のこれからの活動や取り組みに活かしていきたいというポジティブな姿勢がうかがえる。研修生に対しても、「どの研修生も『自分から』というように前向きで積極的だった」という姿勢についても多くの生徒が感心したようである。

Ⅳ．今後の課題

来年度以降も取り入れていきたい。ただ、そのときは研修生にあらかじめテーマを伝えておいて、それについてまた関連していることなど研修生が自分の国ではどのような状況なのか少しでも意見交換をする内容を用意して、交流に臨むのはどうだろうか。そうすることで、テーマについて研修生が事前に理解されていて、日本との違いについて生徒と意見交換ができるとより相互に理解が深められるとも感じた。

また、生徒が来校される研修生の国々のことを事前学習で調べ、日本との比較もできれば、発表内容が広がるのではないかと考えている。

柔道体験は放課後であったため、一部の生徒のみが参加した。感想に取り上げている生徒が多く、今後は一緒に体験するプログラムを検討したい。

そして、“生徒が自ら企画を立てて運営することを通して学び合う”、そのようなことができるように投げかけていくことを考えている。スポーツやオリンピック・パラリンピックを題材にしたムーブメントが生徒から提案されて、自分たちで課題に取り組めるような学びの場を設けることである。それが、これからの生活や社会で答えのない課題に直面したとき、自分の考えをもち、そして他者と協働してよりよいものを創出することにつながるからである。

Ⅴ．最後に

この交流の時期にオリンピズムということばを生徒には伝えていなかった。しかし、生徒の感想からは、自らが体験し味わったことを表現した内容は、まさしく彼らが云わんとしていることはオリンピズムのことである。彼らに宿るオリンピズムの醸成を加速させる機会であった。そして、「誰かと、2020 年東京オリンピック・パラリンピックで再会できたらと思う。サポートスタッフやボランティアとして参加したい。」とあるように、この国際交流の成果が将来の人生の豊かさにつながっていくことを切望している。

当日は、ここはどこ？日本？附属中学？と感じられて、附属中学が海外にいるような時と場を過ごすことができた。この貴重な機会を与えていただいた筑波大学真田久教授をはじめとして関係する方々にこの場をもって感謝したい。

附属視覚特別支援学校生徒と IOC 委員との交流プログラム

附属視覚特別支援学校　　星 祐子

2014 年 10 月８日から日本政府のスポーツを通じた国際貢献策「Sport for Tomorrow」の一環として、外務省の招聘により, シュミット・パール国際オリンピック委員会（IOC）委員（前ハンガリー大統領）が訪日した。10 日午前には、東京キャンパス国際スポーツアカデミーセミナーでの授業を行い、学長との昼食会後、午後から石隈利紀教育長･真田久体育学群長（オリンピック教育プラットフォーム事務局長）らと本校を訪問した。

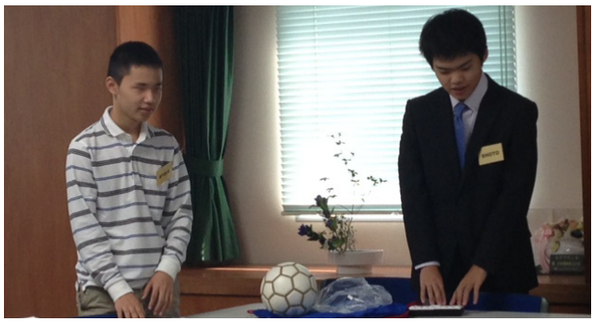
シュミット氏は、中学部３年生の体育の授業「ゴールボール」を視察、2012 ロンドンパラリンピックで、当時、当校の高等部 2 年生がメンバーの一員として金メダルに輝いたゴールボールについて、詳細なルールについて質問をするなど、その練習試合を熱心にご覧になった。その後、グランド、12 メートルプールなど体育施設を視察し、水泳指導における配慮などに興味深く耳を傾けていた。

そして、高等部 1 年生との懇談、生徒は、シュミット氏の来校が決まった 1 週間ほどの間に、ハンガリーの歴史、文化、スポーツなどの事前学習と英語でのスピーチを準備し、当日を迎えた。緊張しながらも、生徒たちは全て英語で、歓迎の意、学校生活の様子､ブラインドスポーツ等についてスピーチを行った。そして､「ハンガリーで盛んなスポーツはどんなスポーツですか？」などハンガリーのスポーツ、文化等についての質問も行った。和やかに懇談は進み、シュミット氏からは、「みなさんに大いに期待しています。2020 東京オリンピック・パラリンピックで会いましょう！」とのメッセージとともに、サウンドテーブルテニスラケットと色紙にサインをいただいた。

当日は、50 年前の東京オリンピックの開会式と言う記念すべき日にあたり、その日に、ＩＯＣ委員でフェンシングの金メダリストであるシュミット氏に訪問いただいたことは、生徒達に、スポーツへの意欲やオリンピック・パラリンピックへの関心を大いに高める契機となった。また､「英語でコミュニケーションをとろう」と事前学習をした生徒達にとって､英語でのスピーチ、質疑応答は語学への関心を高め、自信にも繋がった。

シュミット氏の帰国後、手紙が届いた。以下は、その一部である。

> Comming back to Hungary I take this opportunity to thank you for showing me arround in the Special Needs Education School and make it possible for me to meet your excellent pupils.
> It was a touching moment to experience those fantastic children’s effort to be fully recognised members of the society.



今回の IOC 委員の訪問を契機に、生徒達が他国の歴史、文化、スポーツなどを学び、英語でコミュニケーションをとろうと取り組んだこと自体が、オリンピック・パラリンピック教育の大きな目的である国際理解・平和教育の推進、そして国際的な視野を備えた人材育成に繋がるものと考える。

小学校教育における年間計画に基づいたオリンピック・パラリンピック教育の実践

八王子市立横山第二小学校　　上田隆司

本年度、本校が東京都からオリンピック・パラリンピック教育推進校の指定を受けました。オリンピック・パラリンピック教育を推進する上で、年間計画の中でどのように取り組んでいくかを実態に即しながら考えました。

そこで本校では、各学期にテーマを設定して取り組むことにしました。１学期は「心の教育」、２学期は「国際理解とスポーツの実際」、３学期は「パラリンピック教育と国際理解」と決め、年間計画に基づきながら「学習」「生活」「学校行事」という視点で取組を考えました。

まずは「心の教育」です。実態をもとに考えていく中、学習面と同時に内面（生活面）を育てていく必要性を感じました。オリンピックに関わらず、今後の生活に長く浸透させていくには、一人一人の心を育てていく必要があります。本校では、「おもてなし」を「思いやり」ととらえ、１学期は行事を含めすべての指導の中で本校の教育目標にもある思いやりにつなげながら浸透させることに力を入れました。

まず、特別授業として江上先生を講師にお招きしました。特別授業を子供たちの中で印象づけるために、事前に映像を作成しました。この映像は、オリンピック教育を推進していく上での導入としてのねらいでした。オリンピック教育の５つの教育的価値を、学校の中でどう実践できるのかを考えさせるきっかけとして作成しました。

また、江上先生にはご自身の経験をもとにされながら、日本の良さである「おもてなしの心」について教えていただきました。特に印象深かったのは、あいさつの仕方です。あいさつで大切なこととして①まず相手の目を見る②言葉を相手に伝える③お辞儀をする、ということを丁寧に教えてくださいました。身近な内容だったので実感として子供たちにも伝わり、授業が終わった直後から子供たちの挨拶の仕方が変わりました。今では、教師も子供たちも自然と意識できるようになりました。

２学期には、「国際理解とスポーツの実際」として、たてわり班を活用した異学年交流として「横二リンピック」という行事を行いました。これは、オリンピック種目はもちろんのことですが、６年生を中心に子供たちがいろいろな運動に親しむ中で、スポーツの楽しさを感じさせてあげることをねらいとしています。さらに、前後半に分けてのワークショップ型にすることで、伝える楽しさや関わる楽しさを味わうことができます。

最初に取り組んだのは、中心になる６年生へのオリンピック学習です。オリンピックの淵源から各種目のルール、その種目で活躍する日本や世界の選手について学習しました。その上で、担当したスポーツの楽しさや世界で活躍する選手の記録を実感できるような場を考えました。オリンピック教育の副読本やインターネット、図書室を使いながら場の大きさや形や向き、道具づくりや的、ゴールの大きさなど、細部までこだわりました。また、国旗や国のようす、日本とのちがいなど、低学年にもわかる内容を考えました。当日は体育館と校庭に分かれ、全２４種目の競技を体験的に紹介しました。各ブースでは、まず最初に国や種目の説明を発表し、その後で世界で活躍する選手の写真や記録を掲示することで、より実感をもって運動に親しめるように工夫をしました。当時テレビで流れていたオリンピック・パラリンピックのテーマソングを流したことで、活動した子供たちは時間を忘れ、楽しみながら学ぶことができました。

成果としては、一つ目に、いろいろなスポーツを知るきっかけとなったこと、です。二つ目に、各ブースで紹介したスポーツの世界記録や日本記録を表示・掲示し、そこを目標に運動を実際にしたことで、テレビの世界だった記録を体感することができたことです。

よこにリンピック終了後、それまで単一的な遊びだった子供たちの遊び方が、遊ぶ種目や場・ルールの工夫などが見られるようになりました。また、休み時間に校庭で遊んでいると、「先生もっと遠くに投げるコツを教えてほしい」「もっと速く走る方法を教えてほしい」などを聞きにくる児童が増えました。

次に、道徳や総合的な学習の時間で学習したことを生かして、周年記念式典終了後に今までお世話になった地域の方々へ感謝の気持ちや学校自慢などを、劇や手作りのスライドを使って「おもてなし」しました。道徳の授業から「愛校心」を学び、６年生が学校の良さをパワーポイントで紹介したり、校内を案内しながら説明したりしました。すべて子供たちが行ったので、地域の方からも大絶賛していただきました。

次に、「運動大好き横二っ子」のテーマのもと、校内整備の一環としてオリンピックへの関心を高め、子供達のあこがれや

目標となるように、体育館に掲示物を作成しました。授業の導入段階で紹介することで、驚きと同時に記録に挑戦してみたいという意欲につながりました。年間を通して取り組んだことで、体力の向上にもつながりました。

最後に、プロスポーツ選手との交流授業を行いました。肌で感じる実技はもちろんですが、夢授業としてプロ選手の方が授業をしてくれ、幼少期の挫折や転換期などを通して、子供たち一人一人に自分の夢を真剣に考えさせるきっかけづくりとなる授業を考えました。

３学期は「パラリンピック教育と国際理解」として、①一班一国運動②北京パラリンピック選手の高田さんをお招きするパラリンピック教育の取り組み③国際交流、を行いました。

「一班一国運動」は、長野オリンピックから始まった一校一国運動からとったもので、この取組を通して、世界の国々について親しみをもつ機会とすることをねらいとしています。各クラス生活班ごとに１つの国を担当し、国旗や国技、有名な選手や文化や芸術、言葉や歴史について調べ、画用紙や模造紙にまとめて掲示します。学校全体として６４カ国について学びました。完成したものを廊下一面に掲示しましたが、自分たちが作ったものが掲示されていたので、親しみをもって学習することができました。

また、６年生が社会科のオリンピックを扱う単元と総合的な学習に時間を生かしたオリンピック・パラリンピック新聞を作成しました。

二つ目にパラリンピック教育として、北京パラリンピック選手の高田朋枝さんを講師にお招きし、スポーツの楽しさや夢への努力の大切さ、福祉の視点から考える私たちにできること、などについて考えました。１～３年生までは、実際に目隠しをしてゴールボールを体験しながら、その魅力と難しさを学びました。また４年～６年生は、体験を通しながらみんなが安心して過ごせる町をつくるために、一人一人ができることを考えました。

さらに６年生は、総合的な学習の時間で高齢者・視覚障害者の視点に立った授業も同時に進めていきました。実際に重りやアイマスク、車椅子を使った体験教室を行うことで、いろいろなことに気づくことができました。交流会終了後、６年生との交流会では、学習した中で感じたことを発表し、高田さんのお話も聞きながら自分の考えを深めることができました。

そして最後に、総合的な学習の時間を使った「国際理解」の授業です。来てくださる外国の方に自国の良さを紹介してもらうとともに、日本の良さを「おもてなし」の気持ちを込めて伝えました。日本の国について子供たちなりに調べ、理科の面白実験や紙芝居を使った寸劇、食文化などの日本文化を体験していただきながら良さを知ってもらいました。子供たちの感想の中でも、「テレビなどで知る事よりも、実際に自分で見て、聞いて感じることの大切さを感じた。今まで以上に日本が好きになった」と感じている子が多くいました。

このように、３学期は一班一国運動、壁新聞、パラリンピアンとの交流、異文化交流を通して、平和の祭典であるオリンピック・パラリンピックについて考えていきました。オリンピック・パラリンピックはスポーツを通して心と心の交流をしているんだということを子供たち一人一人に考えさせることができました。世界を身近に感じることができました。

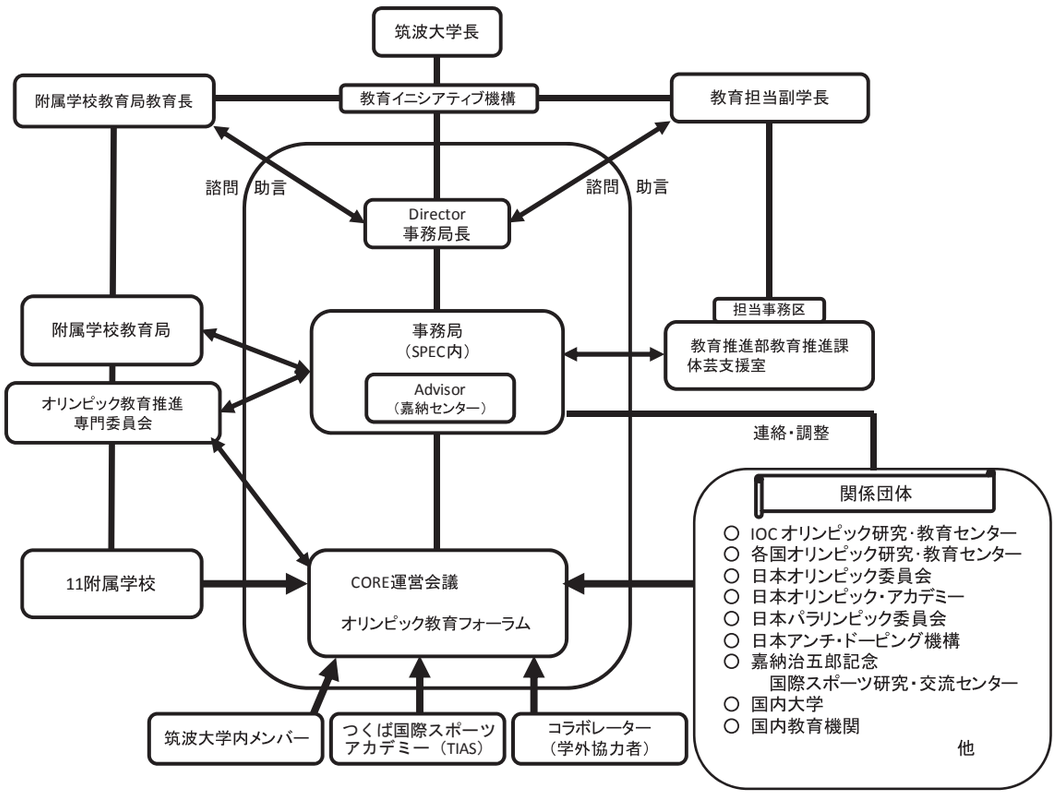
オリンピック・パラリンピック教育といっても難しいものではなく、今まで学校で取り組んできた内容に、オリンピック教育の視点を加えるだけで、今までの活動により深みと広がりが出てくることを実感します。表面的なものを整備していくことも大切ですが、それだけでは時間とともに忘れられ、子供たちの中に残りません。真新しいものは、最初は興味をもちますが長続きしません。一つ一つの取り組みを通し、オリンピック・パラリンピックという国際的な祭典を身近に感じさせてあげること、一人一人が、この機会に何かに挑戦しようという目標を見つけさせてあげること、そしてその為に我々教育者がどのような場を提供していくべきかということに力を入れていくべきではないか感じます。

来年度も本校はオリンピック教育推進校の指定をいただきました。現在、来年度の計画を考えている段階ですが、二年目だからこそできる取組を現在考えています。その一つとして、オリンピックに出場された選手の方をお呼びして陸上運動に取り組んでいきたいと考えています。

筑波大学附属学校オリンピック教育推進専門委員会委員（平成 26 年度）

委員長	石隈　利紀	附属学校教育局教育長
副委員長	今井　二郎	教育長特命補佐
副委員長	吉沢　祥子	特別支援教育研究センター教諭
	真田　　久	体育専門学群長、体育系教授
	江口　勇治	附属学校教育局教授
	松本　末男	附属学校教育局教授
	宮崎　明世	体育系准教授
	眞榮里耕太	附属小学校教諭
	國川　聖子	附属中学校教諭
	浅見　道明	附属高等学校教諭
	横尾　智治	附属駒場中・高等学校教諭
	渡會　愛梨	附属坂戸高等学校教諭
	寺西　真人	附属視覚特別支援学校教諭
	苦瓜　道代	附属聴覚特別支援学校教諭
	根本　文雄	附属大塚特別支援学校教諭
	小坂　桂子	附属桐が丘特別支援学校教諭
	河場　哲史	附属久里浜特別支援学校教諭

筑波大学オリンピック教育プラットフォーム組織図



附属学校におけるオリンピック教育推進専門委員会設置要項

平成 23 年 3 月 1 日
附属学校教育局教育長決定

（趣旨）

1. 附属学校国際教育推進委員会設置要項（平成 20 年 4 月 25 日、附属学校教育局教育長決定）6 の規定に基づき、附属学校における国際平和教育としてのオリンピック教育を推進するため、附属学校におけるオリンピック教育推進専門委員会（以下「専門委員会」という。）を設置する。

（任務）

2. 専門委員会は，次に掲げる事項を行う。
① 附属学校におけるオリンピック教育の企画・立案に関すること。
② オリンピック教育プラットフォーム事務局との連絡調整に関すること。
③ その他，附属学校におけるオリンピック教育に関すること。

（組織）

3. 委員会は，次に掲げる委員で組織する。
① 附属学校教育局教育長特別補佐（教育長が指名する者）
② 附属学校長が推薦する附属学校教員 各 1 人
③ その他附属学校教育局教育長が指名する者 若干人

（委員長等）

4. 専門委員会に委員長を置き，前項第 1 号の者をもって充てる。
(2) 委員会に副委員長を置き，委員長が委員のうちから指名する。
(3) 委員長は，委員会を主宰する。
(4) 副委員長は，委員長を補佐し委員長に事故があるときには，その職務を代行する。

（委員の任期）

5. 委員の任期は 1 年とする。ただし，再任を妨げない。
(2) 前項の規定にかかわらず，任期の終期は，委員となる日の属する年度の末日とする。

（事務）

6. 委員会に関する事務は，附属学校教育局学校支援課が行う。
附 記 この要項は、平成 23 年 4 月 1 日から実施する。

オリンピック教育 vol.3 2014/04-2015/03

2015 年 3 月発行

発行者　筑波大学オリンピック教育プラットフォーム / 附属学校オリンピック教育推進専門委員会
発行所　オリンピック教育プラットフォーム (CORE)　事務局
〒 305-8574　茨城県つくば市天王台 1-1-1　筑波大学 SPEC 棟 307 号室
事務局長　真田久
編集者　荒牧亜衣、大林太朗、成瀬和弥、村上祐介